

慶應義塾ミュージアム・commons × 飯沼観音圓福寺
Keio Museum Commons × Inunakannon Enpukuji

嵯峨本の 誘惑の

豪華活字本にみる夢

The Temptation of Saga-bon:
Dreams and Devotion in Exquisite Printed Books

KeMCo Exh.18

ISBN 978-4-910840-11-6

豪華活字本にみた夢：嵯峨本の誘惑

カタログ正誤表

本書に下記の誤りがありました。
お詫びして訂正させていただきます。

● p.12| 作品 no.3 材質技法

[誤] 絹本着色

[正] 紙本着色

● p.89| 作品 no.55

[誤] 半葉 12 行

[正] 半葉 11 行

● p.44| 作品 no.23 翻刻

[誤] 夏日

[正] 夏〔日〕

● p.92| 作品 no.26

作品管理番号

[誤] AW-CEN-001762-0000

[正] AW-CEN-000851-0000

● p.46 および p.93|

作品 no.25 筆者

[誤] 宗祇

[正] 宗祇

● p.92| 作品 no.27

作品管理番号

[誤] AW-CEN-000851-0000

[正] AW-CEN-001762-0000

● p.50| 作品 no.26 翻刻

[誤] 座成被成候や。

[正] 座被成候や。

● p.93| 作品 no.52 筆者

[誤] 伝二条為氏筆

[正] (記載なし)

● p.58| 作品 no.34 翻刻

[誤] ふるさとに帰るかへるかりかね

[正] ふるさとに帰るかりかね

嵯峨本の
誘惑の

豪華活字本にみた夢

The Temptation of Saga-bon:
Dreams and Devotion in Exquisite Printed Books

KeMCo Exh.18

はじめに

このたび当館では、展覧会「慶應義塾ミュージアム・ commons × 飯沼観音圓福寺 嵯峨本の誘惑」を主催いたします。

「嵯峨本」は、日本の出版史上、最も美しい書物のひとつと称されてきました。色鮮やかな料紙、きらきら光る地模様、斬新な挿絵に端麗な活字を伴わせるなどして、古典文学の世界をさらびやかに描き出したこの書物群は、京都・嵯峨の豪商、角倉素庵すみのくろそあんによって刊行されたと考えられます。膨大な手間と高度な技術を惜しみなく注いで作られた嵯峨本は、まさに芸術品であり、新たに始まった泰平の時代を謳歌する人々の、本作りへの情熱と好奇心を今日に伝えていきます。

本展覧会では、世界有数の嵯峨本の所蔵数を誇る、千葉県銚子市・飯沼観音圓福寺の多彩なコレクションを中心に、慶應義塾が所蔵する貴重な蔵書も加えて、その美しさや面白さを実感いただくとともに、いまだに謎多き嵯峨本をめぐる研究の最前線をご紹介します。豪華絢爛な嵯峨本の世界に誘われ、心ゆくまでご堪能ください。

最後になりましたが、本展開催にあたり、貴重なご所蔵品をご出品いただいた飯沼観音圓福寺をはじめ、ご協力を賜りました関係各位に、心より御礼申し上げます。

二〇二五年九月

慶應義塾ミュージアム・ commons

慶應義塾ミュージアム・コモンズ×飯沼観音圓福寺
嵯峨本の誘惑…豪華活字本にみた夢

二〇二五年九月三十日(火)―十一月二十八日(金)

慶應義塾ミュージアム・コモンズ(三田キャンパス東別館)

主催…慶應義塾ミュージアム・コモンズ

飯沼観音圓福寺

協力…慶應義塾大学附属研究所斯道文庫

慶應義塾大学三田メディアセンター

共同企画…佐々木孝浩(附属研究所斯道文庫教授)

企画協力…佐々木康之(文学部准教授)

Keio Museum Commons × Iinumakannon Enpukuji
The Temptation of Saga-bon: Dreams and Devotion in Exquisite Printed Books

September 30 (Tue.) – November 28 (Fri.), 2025

Keio Museum Commons (Mita Campus East Annex)

Organised by Keio Museum Commons and Iinumakannon Enpukuji

Cooperated by Keio Institute of Oriental Classics (Shido Bunko) and
Mita Media Center (Keio University Library)

Co-curated by Takahiro Sasaki (Professor, Keio Institute of Oriental Classics)

Supported by Yasuyuki Sasaki (Associate Professor, Faculty of Letters, Keio University)

目次

3 はじめに

6 飯沼観音圓福寺飯沼文庫の嵯峨本コレクションについて

9 飯沼観音圓福寺の寺宝

14 一、古活字版の時代

20 二、謎多き「嵯峨本」

25 三、嵯峨本伊勢物語の挑戦

47 四、光悦か素庵か

60 五、嵯峨本、いろいろ

72 六、光悦謡本の不思議

81 七、伝嵯峨本源氏物語という存在

92 作品リスト

94 もつと嵯峨本を知りたい人のための参考文献リスト

飯沼観音圓福寺飯沼文庫の 嵯峨本コレクションについて

利根川河口に位置する銚子漁港に程近い丘の上に鎮座するのが、坂東三十三観音の第二十七番札所の飯沼観音圓福寺観音堂です。傍を通る県道二四四号線を渡って銚子電鉄の観音駅方向に歩くと、二分足らずで大師堂を中心とする本坊に至ります。戦後に広大な寺域の中を県道が横切ったために、別々の寺院のように見えますが一体のもです。

飯沼観音圓福寺は、今回出品いただいている明暦二年（一六五六）の「飯沼山観世音縁起絵巻」（作品3）に記されているように、神龜五年（七二八）に漁師が海中から引き揚げられたと伝えられる十一面観音を本尊とする古刹です。観音堂などの伽藍は、第二次世界大戦の空襲による焼失後の再建ですが、大師堂は嘉永元年（一八四八）の建立です。大師堂の名からも推測できるように真言宗の寺院です。

同寺には、先述の縁起絵巻の他、建武や明德などの年号を有する中世文書や、寛文九年（一六六九）に完成した縦約二・五メートル、横約一・七メートルの巨大な刺繍涅槃図などの由緒ある寺宝がありますが、飯沼文庫と名付けられた古典籍





のコレクションも所蔵されています。

このコレクションは現住職・平幡照正師の祖父に当たる、先々代住職の平幡照政師（一九〇六―一九八）の蒐集になるものです。奈良写経や宋版一切経など寺院らしい仏書群もレベルの高いものですが、文学関係書は写本版本共に絵入り本を含めて実に素晴らしいもので、特に江戸時代の版本の充実ぶりには目を見張るものがあります。その他にも近代作家の原

稿や初版本なども多数存在し、対象の幅広さにも驚かされます。それらは出鱈目に集められたのではなく、幾つかのテーマに沿って質の高いものを積極的に蒐集したものであることは、文庫の全貌を知ると良く理解できます。

照政師は京都帝国大学法学部を卒業し、若き日には裁判官を目指していたのですが、事情があつて僧籍に就き、父・照法師を継いで圓福寺住職となったのは昭和三十六年の



上：十一面観音
下：本堂五重塔

ことでした。戦後の混乱の中で、華族などの旧家から質の高い古典籍が大量に流出し、そのほとぼりも冷めないままに、市場に少なからぬ古典籍が滞留していた時代に巡り合い、書物に対する熱意と知識を動員して、善本・希書を集め続けた結果として形成されたのが飯沼文庫なのです。

照政師が特に好んだのが、江戸初期の芸術性の高い版本として著名な嵯峨本の一群でした。当時から海外を含めて人気の高い存在でしたので、蒐集には苦労も多かったものと想像できます。それがこれほどまでに数多く集まったのは奇跡的であり、世界屈指の嵯峨本コレクションであると断言できます。

しかしながら、そのコレクションは世間に広く知られることはありませんでした。善本のみを数多く扱った伝説的な古典籍商で、照政師との付き合いが深かった反町茂雄の追悼文集、『弘文荘 反町茂雄氏の人と仕事』（文車の会、一九九二）に収載された、わずか四頁の「弘文荘反町さんと私の嵯峨本」が、唯一の飯沼文庫に関する公開された文章です。昭和二十三年頃から安価な版本を購入しはじめたこと、貴重な仏書が驚くほど安価であったこと、「伊勢物語（肖聞抄）」（作品25）を契機として嵯峨本を蒐集しはじめたことなどが記されています。嵯峨本の八割が弘文荘より求めたものと記されており、質の高いコレクションを形成できた理由が判明します。

照政師の逝去後、この飯沼文庫は圓福寺のお蔵にひっそり

と収蔵されたままとなっていました。若き日に祖父・照政師の神保町などの古書店訪問に、運転手として協力されていた照正師は、これを惜しんで、地元銚子を始めとする多くの人々に披露することを思い立たれ、平成二十六年十一月に初めて寺宝展を開催されました。以後一月の涅槃会の日を含む十四・十五日の両日と、十一月中の週末の二日間との年二回を基本として継続されており、新型コロナウイルス流行による中断を挟んで、令和七年二月の会で十九回を数えています。

この飯沼文庫の調査や寺宝展の開催に、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫が協力していることから、より広い地域の人々に、より多くより長く、貴重な古典籍の数々をご覧いただきたいとの照正師の願いを実現するべく、このたび慶應義塾ミュージアム・コモンズの賛同をえて、展覧会「嵯峨本の誘惑…豪華活字本にみた夢」を開催する運びとなったものです。照正師には、出品のみでなく多面的なご協力をいただいたことをここに明記して、慶應義塾の関係者一同を代表して感謝の意を表したいと思います。

これだけまとまった貴重な嵯峨本に接するチャンスは滅多にありません。何故嵯峨本は古来評価が高く、人気があるのか、その存在が何を意味し、どんな背景を有しているのかなどなど、嵯峨本研究の最前線の成果を反映した解説とともに楽しんでいただけますと幸いです。

（佐々木孝浩）

飯沼観音圓福寺の寺宝

飯沼圓福寺
建立
寺宝
淨業殿



淨業殿

1 五大尊像

江戸 絹本着色 描表装



五大尊は、不動明王(中方)、降^{くだり}三^{さん}世^ぜ明王(東方)、軍荼利明王(南方)、大威徳明王(西方)、金剛夜叉明王(北方)からなり、忿怒相を特徴とする明王の代表格である。鎮護国家を祈る仁王経法や、息災・調伏を目的とする五壇法の本尊となる。絵画では五大尊、彫刻では五大明王と呼ぶ場合が多い。本作

は五大尊を一画面に描いたもので、中央の不動明王の周囲に、向かって右下から時計回りに降三世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉明王が配される。いずれも火焰光をまとい、不動以外は多面多臂多目(大威徳明王はさらに多足)など密教尊らしい怪異な姿を示す。

日本の五大尊像の現存最古例

は、空海が構想した八四四年頃開眼の京都・東寺講堂の彫像であり、特に不動明王は空海が請来した図像(「弘法大師様」として重んじられたが、一方で時代を経る毎に各尊像の図像にはバリエーションが生まれた。その点本作は、不動明王の図像が弘法大師様とそれ以降に流行したものが混ざっている。また大威徳明王は、通常の水牛の上に坐す姿ではなく、猛進する水牛の上に立つ姿である。これは大威徳明王を本尊とする大威徳転宝輪法で用いられた図像で、鎌倉時代後期以降に遺例が見られる。

絵画表現としては、各尊の肉身や衣に用いられる肥瘦のある線や、厚く塗られた金泥、濃密な彩色など丁寧な描きぶりが見て取れ、同様の姿勢は描表装にも表れている。それまでの五大尊の様々な図像を組み合わせながら、巨幅に濃彩で仕上げた近世仏画の本格作ということができらるだろう。

2

不動明王二童子像

鎌倉 絹本着色

不動明王を描く。中央の不動明王は、左手に絹索、右手に宝剣を執り、海中の岩場に立つ。頭部の表現は、左目をすがめ、右の牙を上、左の牙を下に出し、頭頂に莎髻（莎草で結った髻）を表し左耳前に弁髪を垂らすもので、九世紀末頃に

整備された不動の姿の特徴である「不動十九観」に則る。画面左下の矜羯羅童子は、胸前の左手で密教法具の独鈷杵を、左手で蓮茎を執り、右下の制吒迦童子は、右手に持った金剛棒の先を地につけ、左腕を右腕に交差させるように構える。これら不動の頭部と脇侍の図



像は、京都・醍醐寺所蔵の不動明王の白描図巻中に「玄朝様」として所収されるものと一致する。また、不動の左右二本の炎柱が頭上で交差する火焰光も、いくつかの白描図像中に見られるものである。

画面は絹や表面の彩色が欠落する部分があるなど、保存状態は良好とは言えないが、仔細に見ると装身具には金箔を用い、頭髪や衣文線は金泥で丁寧になぞっていることがわかる。線描も衣服には肥瘦のある線を用いながら、力強い線によって対象を比較的良好に描いている。本作には、古い外題として「伝土佐光起筆」の貼り付けがあるものの、制作年代は中世にさかのぼることが推定される。

1（五大尊像）も本作も、真言密教において重視される尊格であり、真言宗の圓福寺に所蔵されるに相応しい作例である。



第三図



第五図

3

飯沼山観世音縁起絵巻

明暦2年(1656)

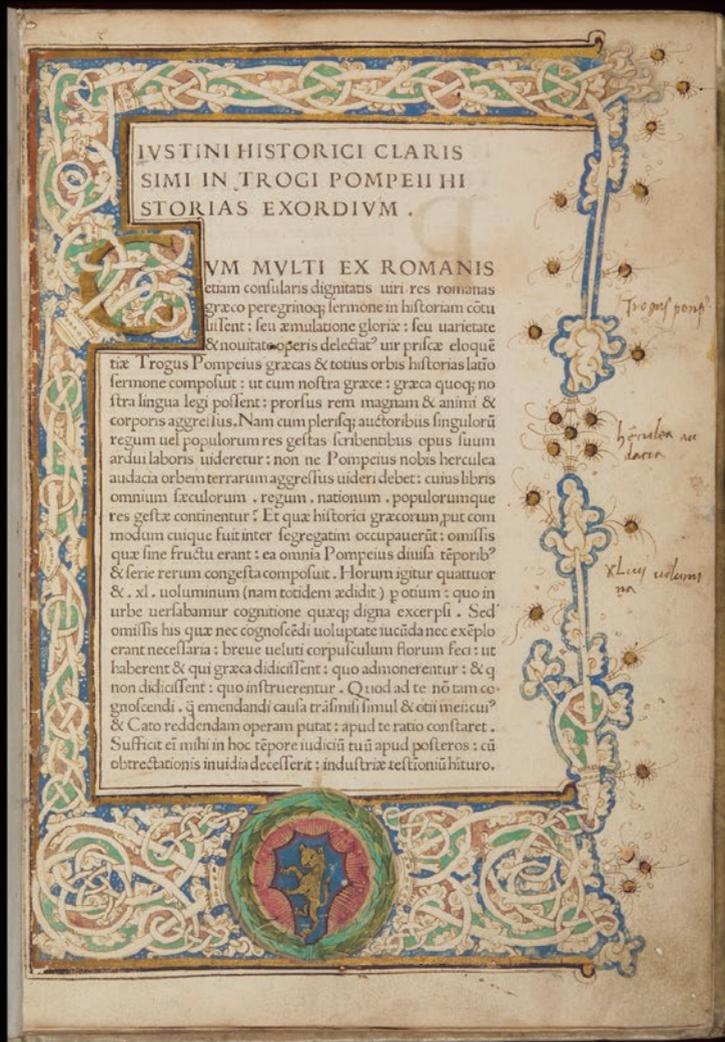
狩野友仁正成筆 絹本着色

本絵巻は、六段の詞書と五場面（の絵画）から構成され、飯沼観音圓福寺の縁起を伝えている。物語は、神龜五年（七二八）、漁師が夢に現れた翁から託宣を受ける場面に始まる（第一図）。同じ夢を見たという、もう一人の漁師と二人で協力して（第二図）海へ網を投げ入れると、海中からたちまち観音像が出現する（第三図）。その後、圓福寺が建立されると観音が安置され（第四図）、境内には観音を一目拝もうと人々が集い、観音像とともに引き揚げられたという瑠璃石の開帳や相撲の奉納が行われる（第五図）という筋立てである。メインストーリーに加えて、絵巻には銚子ののどかな漁の風景や当時の壮観な伽



藍が描かれるほか、境内に集う人々が蹴鞠や宴を楽しむ素朴な姿がほほえましい。

奥書には、明暦二年（一六五六）、松平外記忠直が狩野友仁正成なる絵師に描かせ寄進した旨が墨書される。松平外記家は飯沼村に所領を与えられた旗本で、代々が圓福寺に帰依し、同寺文書にも一族の寄進記録が残る（山澤学・蓼沼綾子「飯沼観音信仰と十七世紀の銚子―「飯沼山観世音縁起」を中心に―」歴史地理学調査報告書九号、二〇〇〇年）。なお、絵師の正成については本絵巻以外の作例が管見の限り見つからない。新たな作例の出現が俟たれる。



日

本文化史上、いえ日本史上において重要な意義を有していると考えられるのが、江戸初期の商業出版の確立です。多種多様な多数の出版物が、江戸時代の豊穰な文化を育む土壌となり、ひいては明治維新後の急激な近代化を可能にしたといっても過言ではありません。その確立に大きな役割を果たしたのが、「古活字版」と呼ばれる、近世極初期の約半世紀の間に刊行された、活字印刷本群です。仏教書を中心とする漢字文献ばかりの中世期までの印刷から転じて、実用書や娯楽書に至るまでの多様な内容の作品が、漢字に加え片仮名や平仮名の活字をも用いて、五百を優に超える版種で刊行されたと考えられます。

ヨハネス・グーテンベルクが、自身が開発した活版印刷機を用いて聖書を出版した一四五五年以降の、十五世紀中にヨーロッパで刊行された金属活字本は、インキュナブラ（揺籃期本）と呼ばれて高く評価され、研究も活発に行われています。古活字版は百五十年ばかり後ですが、約半世紀間の活字印刷の試行錯誤の時期としての性格は良く似ています。古活字版はまさに日本のインキュナブラなのです。古活字版とは少し妙な名前ですが、後の木製活字本と区別するための呼称です。

記録に拠れば活字印刷は十一世紀中頃に北宋で発明されたとあり、崇寧年間（一一〇二—一〇六年）に刊行された、陶器のような活字を用いた『観無量寿経』が現存しています。活字印刷の技術は朝鮮半島に伝わり、十三世紀前半には高麗で金属活字印刷が行われており、一三七七年頃に刊行された『白雲和尚抄録仏祖直指心体要節』（フランス国立図書館）が、世界最古の金属活字印刷物として、ユネスコの世界記録遺産に登録されています。十四世紀末に始まる李氏朝鮮では、国家事業として銅活字を用いた印刷が活発に行われました。

歴史とは必然と偶然の連なりです。豊臣秀吉による無謀な朝鮮出兵は、結果として大量の朝鮮活字本のみではなく、活字印刷術をも日本にもたらしました。秀吉が後陽成天皇に奉ったと考えられる金属活字により、文禄二年（一五九三）に天皇の命で『古文孝経』が刊行されたことが、『時慶卿記』に見えます。この最古の古活字版である『古文孝経』は現存しませんが、これ以後も後陽成天皇は木製活字を用いて、漢籍のみならず『日本書紀神代卷』や『職原鈔』などの日本人の著作も刊行させています。これらは刊行時期により、「文禄勅版」と「慶長勅版」と呼ばれます。

銅活字はコストも高く技術的にも難しかったので、日本では木製活字を用いた出版が中心となりました。「文禄勅版」以外で銅活字を用いたのは、徳川家康が新たに鑄造させた活字で、元和元年（一六一五）と翌年に刊行させた『大蔵一覽集』と『群書治要』のみで、これらは刊行場所から「駿河版」と呼ばれます。

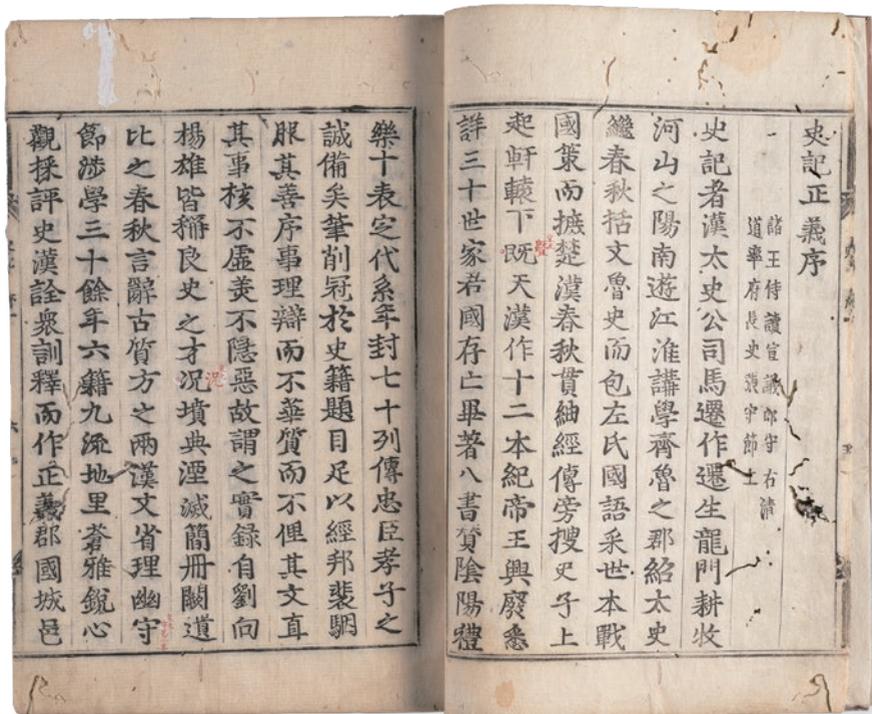
古活字版の初期は、財力を有する寺院による仏教書や医者による医学書などが目立っていましたが、次第に末尾に「本屋新七」などと明示した、出版を職業とし、古活字版を商品として販売する民間業者が現れるようになります。活字の使用は、従来の版木印刷よりも製作経費が抑えられるので、出版を行うことが以前よりも容易になったのです。商品としての可能性を追求していくと、啓蒙性や実用性、さらには娯楽性を重視するようになるのは自然な流れでした。

当然のこととして、仮名文字の作品が出版候補として注目されましたが、ここに一つ大きな障害がありました。片仮名は漢字と同様の方法で印刷できるので問題ありませんが、漢字の草書体から生まれた平仮名は、当時は数文字を続けて書くのが普通だったので、一文字一文字を独立させてしまうと、子供の手習いのようにになってしまうのです。そこで発明されたのが、続けて書かれる数文字を一つの活字とする「連続（連彫）活字」でした。

これにより、今日でも日本古典文学の代表的な作品となっている、竹取・伊勢・大和・宇津保・源氏・狭衣などの王朝系の物語、保元・平治・平家・義経記・曾我・太平記他の軍記物語、栄花・大鏡・水鏡・増鏡などの歴史物語、枕草子・方丈記・徒然草などの随筆など、多くの仮名書きの作品が古活字版として刊行されたのです。

書物の大衆化は、販売価格を下げることを要求されることもなり、その実現のために、次第に活字の書体も芸術的なものから無個性なものへと変化し、文字も小さくなっていきました。これにより需要が増えていくと、部数を増やすことが難しい活字印刷では対応が難しくなり、経費が大きくても、何倍もの部数を長期にわたって供給することができる、従来からの版木を用いる整版印刷に取って代わられることになったのです。

漢字ばかりであったものに、片仮名や平仮名を加えて版本の商品化を推し進めたことは、忘れてはならない古活字版の大きな貢献です。そして、約半世紀の古活字版の歴史の中で燦然と輝く存在が嵯峨本なのです。



4

史記 序目録

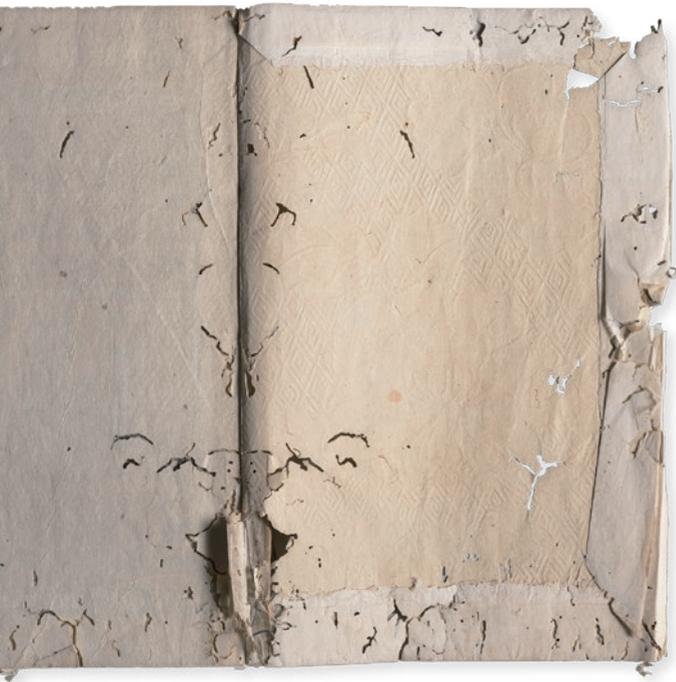
〔慶長8年(1603)以前 角倉素庵〕刊
嵯峨本古活字 1冊

新補茶色表紙(30.8×21.6cm)。

匡郭四周双辺(22.9×17.2cm)、

有界8行17字。

司馬遷撰述の歴史書の国内初の活字本で、慶長八年以前の刊行と判明している。本来百三十巻五十冊本の初冊。やや丸みを帯びた線の太い大型の活字書体や、折目部分の版心の花卉のような模様を持つ魚尾(花魚尾)のデザインなどに、李氏朝鮮の銅製活字本の雰囲気濃厚に感じられ、古活字版の技術が李氏朝鮮由来であることが良く理解できる。「羅山先生年譜」の記述等から角倉素庵の刊行が確認されており、嵯峨本に含めるかどうかについては意見が割れそうなる存在であるが、素庵の関与が明確な唯一の漢字版として貴重である。伝本は約七十本と古活字版としてはかなり多く、川瀬一馬によって、八行有界本・八行無界本・九行無界本の三種に分類されている。本書は行間の界線が存するように第一種本である。国学者・黒川春村の旧藏本で、古い書入れも目立つ。



5
史記 卷31、32

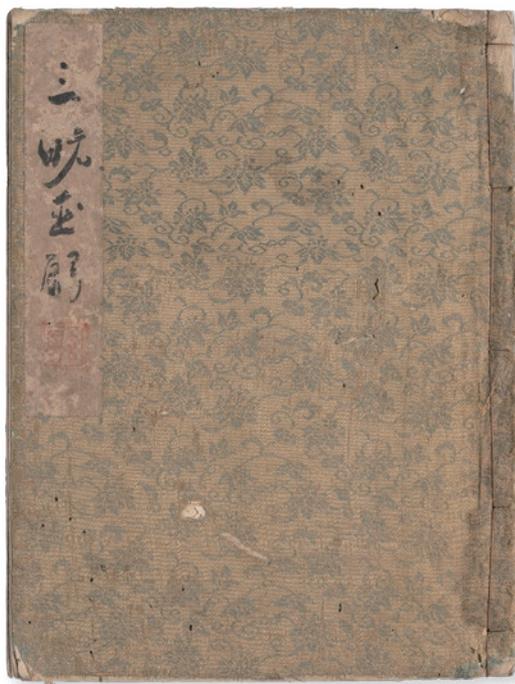
〔慶長8年以前 角倉素庵〕刊
嵯峨本古活字 1冊

原装の白具引地紗綾形牡丹唐
草文空押表紙(29.7×21.0cm)。
匡郭四周双辺(22.9×17.2cm)、
有界8行17字。

やはり第一種に属する一冊のみの
端本ながら、原表紙を有する点で
貴重である。伝本の多い嵯峨本史
記の表紙は、色や模様の異なるも
のが八種も存することを小秋元段
氏が報告している。嵯峨本と関係
の深さを示す光悦流の文字の刷題

簽を有する伝本も存するものの、
この本には外題はない。他伝本の
原表紙の裏貼りから、嵯峨本徒然
草や舞の本の八島・伏見常盤など
の古活字版の刷反故や、「けいち
やう三年」と書かれた文書の断片
などが発見されており、製作環境

を窺う手掛かりとなっている。本
伝本の裏貼りは白紙だが、見返し
が剥がれ模様の凹凸が良く確認で
き、黄色系の表紙を特徴とする朝
鮮版の表紙と、色こそ異なるもの
の、模様を加える技法の共通性を
理解できる。



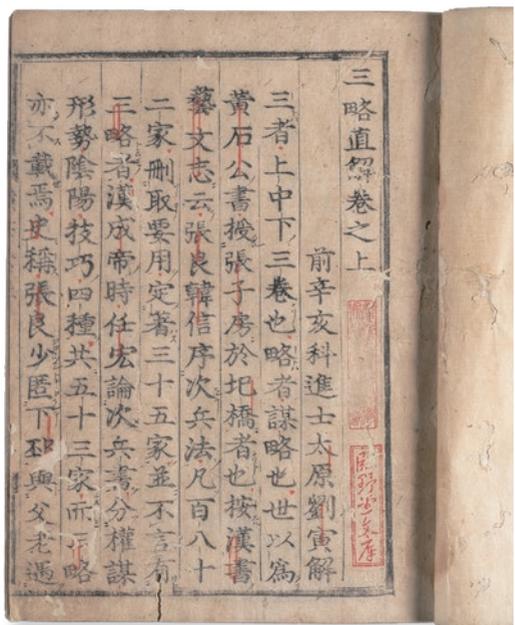
6
三略直解 3卷
〔15～6世紀〕刊
朝鮮銅活字 1冊

後補山吹茶色地桐唐草文綴子表紙
(25.8×19.5cm)。
左肩題簽「三略直解」(南化玄興筆)。
匡郭四周双边(22.0×15.1cm)、
有界9行17字。

中国の兵法書である三略の明の劉
寅による注釈書。斯道文庫で古活
字版として登録されていたが、高
木浩明氏の指摘により朝鮮銅活字
版であることが判明した。李氏朝
鮮では、一四〇三年の癸未字以降、
一四二〇年の庚子字、最も有名な
一四二〇年の甲寅字などの様々な

活字が鑄造されたが、本書は一四
五五年鑄造の乙亥字を用いたもの
である。左肩の題簽の「三略直解」
との墨書の下に「玄興」の朱印が
あり、後陽成天皇らから帰依を受
けた妙心寺の南化玄興(一五三八
—一六〇四)の筆跡であると分か
る。訓点書入れがある他、行間の

書入れを切除した跡を裏から紙を
貼って塞いだ箇所が無数にある。
版心に朝鮮版特有の花魚尾があ
り、嵯峨本史記とも共通している。
銅活字特有の小さな白い気泡が目
立つ。匡郭の隅の切れ込みは横方
向で、斜めの日本の古活字版と異
なっている。臨野堂文庫旧蔵。

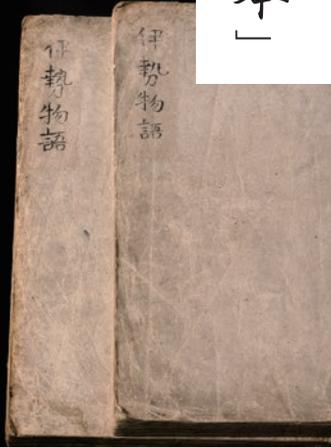
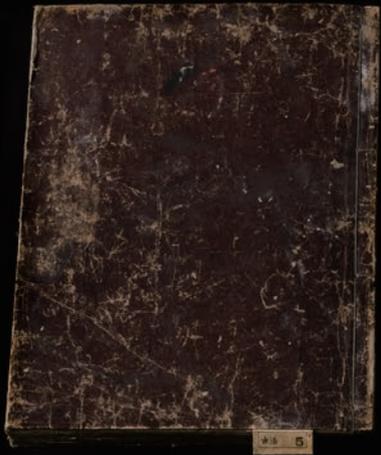


三略直解卷之上

前辛文科進士太原劉寅解

三者上中下三卷也略者謀略也世以爲
黃石公書檢張子房於圯橋者也按漢書
藝文志云張良韓信序次兵法凡百八十
二家刪取要用定著三十五家並不言有
三略者漢成帝時任宏論次兵書分權謀
形勢陰陽技巧四種共五十三家而三略
亦不載焉史稱張良少臣下與父老遇

二、謎多き「嵯峨本」



古 活字版はそうであるだけで貴重書に選定される程の存在です。その中でも「嵯峨本」と称される一群は特に尊重されています。「嵯峨本」は確かに名高いのですが、その定義は明確でなく、またその範疇にも揺れがあります。

古活字版研究において最重要文献と定評のある、書誌学者・川瀬一馬『古活字版の研究』（安田文庫、一九三七年・増補版：日本古書籍商協会、一九六七年）では、「嵯峨本」を、本阿弥光悦ほんあみみつえつの筆跡と美術的意匠により造本されたもの、及びその影響を豊富に備える出版物と定義しています。この考え方は現在でも大きな影響力を有していますが、研究の最前線では、光悦は関与せず、その追随者と考えられていた角倉素庵こそが、「嵯峨本」製作の主体であると認識されるようになっていきます。その名称は刊行場所にならむと考えられますが、嵯峨の地はまさに豪商角倉家の居宅のあった場所でした。

角倉素庵（一五七一―一六三二）は、朱印船貿易で莫大な財を成し、大堰川・高瀬川の開削などで名高い豪商・角倉了以（一五五四―一六一四）の息で、家業を継承する一方、藤原惺窩せいこ（一五六―一六一九）に儒学を、本阿弥光悦に書を学んだ一流の文化人でもありました。本姓は吉田、名は与一で、諱は玄之（後に貞順）、素庵は字です。「嵯峨本」そのものには、素庵の関与は明記されていませんが、昭和女子大学図書館蔵の嵯峨本撰集抄に、素庵の筆跡を元に版行した本を素庵より貰った旨の、元和八年（一六二二）付の法橋玄伯の識語があることなどから、素庵が「嵯峨本」刊行の主体であったことは広く認められています。

川瀬一馬が「嵯峨本」と認定したのは、伊勢物語・伊勢物語聞書（肖聞抄）・源氏小鏡こがたみ・方丈記・撰集抄・徒然草・観世流謡本・久世舞くせま（三十曲本）・同（三十六曲本）・新古今集抄月詠和歌卷・百人一首・三十六歌仙・二十四孝・古今和歌集の十四種です。このうち新古今集抄月詠和歌卷・三十六歌仙・二十四孝・古今和歌集は、活字版ではなく整版本です。研究者によって意見が割れる存在として、源氏物語や扇の草紙・本朝古今銘尽・口伝書などがあります。また十四種に含まれる作品でも、素庵が関与しない模倣版と考えられるものは、加えるべきではありませんが、その線引きは難しく、厳密な認定は非常に困難なのです。

その後の研究の進展として、漢籍の史記や平家物語、更には別種の方丈記にも素庵の関与が認められることを

小秋元段氏が報告されています。小秋元氏はこれらを「嵯峨本前史」のものと位置付けていますが、史記と平家物語を「嵯峨本」に加える意見も存在しており、新しい問題が生じています。

「嵯峨本」は、私的な贈答用に製作されたとの見解もあるように、五色に色付けしたり、雲母の粉で光る模様を印刷したりするなどした上質の料紙に、装飾性の高い光悦流の筆跡で印刷された豪華本であることを基本的な特徴としています。当時の版本で一般的な装訂であった袋綴装の他に、版本では珍しい綴葉装（列帖装）のものや、卷子装のものなど、多様な形態が確認できます。

また一つの作品に複数のバージョンが存在することが多いのも特徴で、在庫切れに伴うと考えられる再組版の他に、料紙や装訂を意図的に変更した例も目立ちます。刊行年が明記される伊勢物語は「嵯峨本」を代表する存在ですが、慶長十三年（一六〇八）版は三種が存在しています。同十四年（一六〇九）、十五年（一六一〇）のものも存在していますが、この兩年のものは模倣版であるので「嵯峨本」から除外すべきという意見もあります。

伊勢物語に先立つ刊行であることが確認されている徒然草では、雲母の模様のある唐紙を使用したもの一種と、色や模様のない素紙を使用した三種が存在しています。綴葉装を用いた百人一首と方丈記には、袋綴装のものもあります。三十曲本と三十六曲本の久世舞も綴葉装です。

一番種類が多い存在として知られるのが、「光悦謡本」と通称されてきた、能の練習用台本の一群です。光悦の関与が否定された現在では、「観世流謡本」と呼ばれることも多いのですが、観世流の謡本は他にも多種が存在しますので、ここでは「光悦謡本」を使用したいと思います。細かく十八種に分類されてもいますが、大きく分類しても五種類に分かれます。謡本は基本的に百曲で一揃なので、残存する点数も多く、一番身近な「嵯峨本」といえます。

嵯峨本やその周辺の書物のデジタル画像が大量に公開されるようになり、本格的な嵯峨本研究も精力的に行われるようになり、嵯峨本の実態が徐々に明らかになってきてはいますが、嵯峨本はまだ謎の多い魅惑的な存在なのです。

7

平家物語 12巻附灌頂卷

[慶長9年(1604)頃]

下村時房刊 12冊

茶色艶出表紙(28.0×20.7cm)。

無辺無界(高22.0cm)

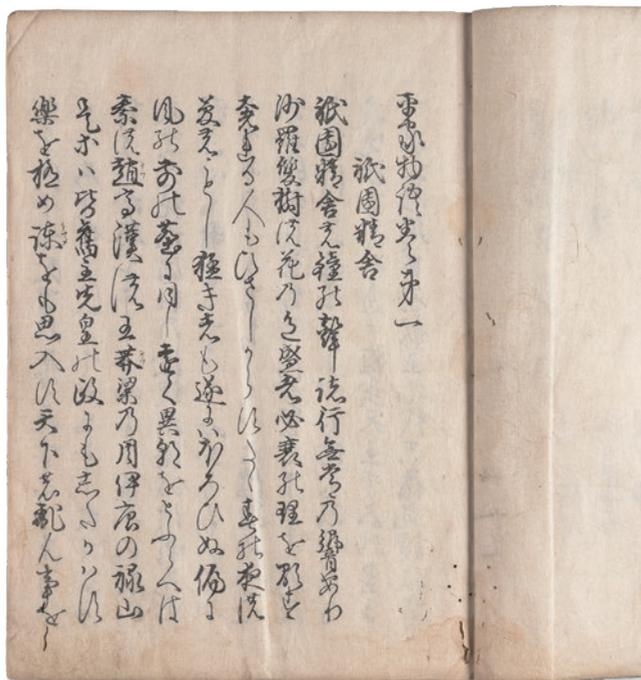
10行17字基本。



軍記物語は人気が高く、平家物語の古活字版も十五種を数える。この本は末尾に「下村時房刊之」とある、「下村本」と呼ばれる語り本一方系の本で、四十本以上が確認されている。元和四年(一六一八)に角倉素庵が尾張藩主・徳川義直に献納したことが知られ、素

庵が刊行に関与した可能性が高く、近時は嵯峨本に加える意見も強い。小秋元段氏は史記などと共に「嵯峨本前史」に位置付けることを提唱している。朝鮮版に見られるような、問題ある文字を切り抜き、裏から貼り付けた紙に正しい文字を捺す切抜き訂正があり、

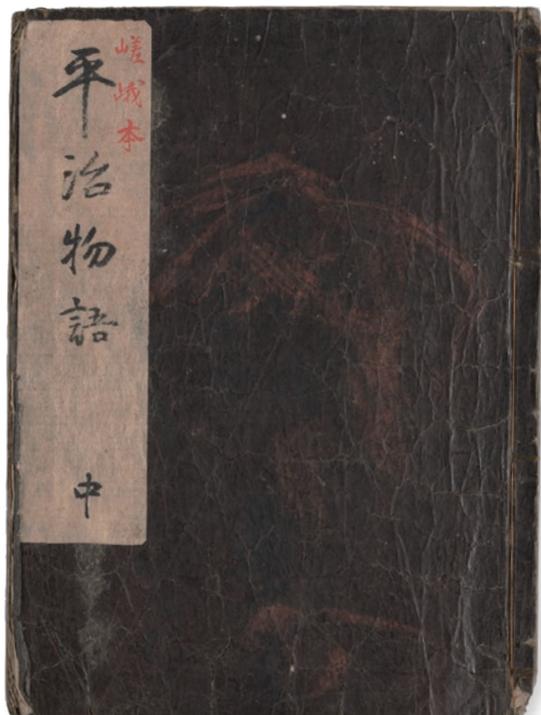
多いものは千カ所以上と報告されているが、この本は訂正の極めて少ない伝本として注目できる。平仮名の古活字版の約束として匡郭はなく、個性的な書風で漢字の比率が高いのが特徴である。西荘文庫(小津久足^{おつひさたり}・安田文庫旧蔵)。



重宝物語 卷之十一
祇園精舎
祇園精舎元種形聲流行書乃譽あり
少羅雙樹は花乃を盛る必表形程を影を
奏する人もひききりてはく喜我表は
差えとく種子老も逆も初らひぬ偏
風能おれ老も月をく異貌をよつ人付
奈は種を漢(乃)五茶梁乃月伊唐の祇山
先亦い皆舊主先皇は改も志よりり
樂を極め疎も思入り天下を配人事せ

8

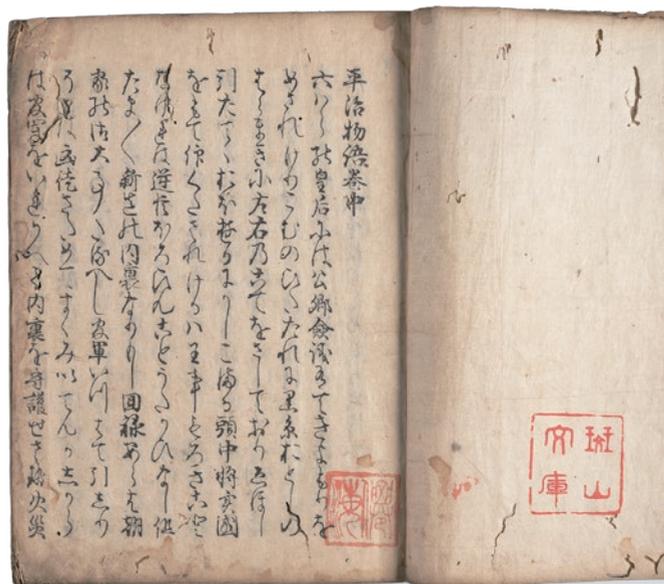
平治物語 3巻存巻中

〔慶長 紀州能阿弥〕刊
古活字 1冊濃茶色艶出表紙(27.8×
20.9cm)。新補左肩題簽に「平
治物語 中」と墨書。無辺無界
(22.8cm) 11行19字基本。

保元・平治両物語は写本版本と
もにセットで製作されることが
多く、古活字版でも十種が確認さ
れている。これは平治物語の末に
「紀州能阿弥鈔梓」とある、川瀬一
馬分類の第三種の、平治物語の中
冊のみの伝本である。伝本は少な

く、六冊が完備した本は珍しい。
題簽の右肩に朱で「嵯峨本」と書
き加えられているように、慶長頃
刊で光悦風の書体を有することな
どから、古くは嵯峨本と見る意見
もあつたものであり、嵯峨本の認
定の難しさを物語る存在である。

やはり匡郭はなく、半葉十一行で
あることからわかるように、や
や文字は小さめでおとなしい書体
であり、嵯峨本的な装飾性は薄い。
国文学者・高野辰之旧蔵で『古活
字版の研究』著録本である。



三、嵯峨本伊勢物語の挑戦



伊勢物語新刊枕余需勸校并系抄
 門一甲之奥書云此物語之根源在人々之流
 不同之由今以天福年不被高孫女抄巨
 然之於恐之訂校之遺少也又圖書卷中
 之流分以爲上下是雖不足動好女人情
 取爲之悦推壹眼目而已

慶長戊申仲夏上流

也吳四書



伊勢物語新刊枕余需勸校并系抄
 門一甲之奥書云此物語之根源在人々之流
 不同之由今以天福年不被高孫女抄巨
 然之於恐之訂校之遺少也又圖書卷中
 之流分以爲上下是雖不足動好女人情
 取爲之悦推壹眼目而已

慶長戊申仲夏上流

也吳四書

伊勢物語新刊枕余需勸校并系抄
 門一甲之奥書云此物語之根源在人々之流

嵯峨

嵯峨本を代表する存在が伊勢物語です。五色の色替り料紙を用いた豪華本であるだけでなく、慶長十三年の刊行であると明示されていること、日本の古典作品で初めて挿絵の加わった冊子版本であること、そして古活字版としては残存数が多いことなどがその理由です。

この伊勢物語には末尾に、刊行の事情などを説明した刊語が備わっています。藤原定家が天福年間（一一三三―一三四）に孫娘に与えた本を元にして本文を正したことを記し、内容に基づく挿絵を加えて、二冊本にしたことを説明し、（目の肥えた）女性を感動させるほどではなくても、子供たちの目を楽しませることはできるのであると説明しています。注目されるのは、慶長十三年五月上旬との日付の後に、「也足叟」と古典に通じた公家の中院通勝（法名素然、一五五六―一六一〇）の号があり、そこに手書きのサインである花押を通勝が自ら書き加えていることです。

女性や子供を引き合いに出すのは、これ以後の絵入り版本にも似た表現を見つけることができるように、謙遜の慣用表現ではありますが、当時の絵入り本に対する意識を窺える文言であるといえます。先行する絵入り版本として、仏教系の絵巻が数例ありはするものの、室町後期に始まった絵入り冊子写本に倣う形で、仮名書きの冊子版本に挿絵が加わったことは、大変画期的な出来事であったのは確かです。

嵯峨本伊勢物語の人氣が高かったことは、慶長十三年中に刊行された後に、何度も同様のものが製作されていることに明らかです。同年中に新しい活字を加えて組み直したものの二種、同十四年の活字と挿絵版本を作り直したものの、同十五年のやはり新しい活字と挿絵版本で刊行されたものの三種に加えて、十三年の二度目のものを模した古活字版や、やはり十三年の二度目のものを基にしてそっくりに作られた覆刻整版本なども確認されています。古活字版が一度にどの程度刷られたのかははっきりしませんが、平仮名の版本草創期に、これだけ繰り返し刊行されているのは驚異的であるといえます。

江戸時代の版本の大きな特徴として、絵入り本が異様に多いことが挙げられますが、嵯峨本伊勢物語は挿絵を加えることの威力を人々に知らしめ、絵入り本流行の礎を築いたと評することができますでしょう。古活字版の時代でも次第に絵入り本が増えていきましたし、整版中心の時代となった十七世紀中頃からは、多くの古典作品の

版本に挿絵が加わるようになり、やがて新作のものも含めて、仮名作品に挿絵があるのが当たり前の時代が到来するのです。

嵯峨本伊勢物語の刊語は、活字ではなく版本で刷られたものですが、それは通勝の自筆を版下にしたものでした。そこに自ら花押を書き加えることは、同じものが多く存する版本を、この世に一つしかない写本に近づける行為であったといえます。印刷物で個人を特定する部分を自筆にすることは、将軍・足利尊氏が、京鎌倉の僧侶を動員して一切経を書写させた際に、各帖末に木版刷りの発願文を加え、その末尾の「征夷大將軍正二位源朝臣尊氏謹誌」中の「尊氏」の二文字を、空白にしておいた部分に自ら書き入れた先例が存在しています。

このことからすると、五色の紙を混用することや、挿絵を加えることなども、当時存在していた写本を真似てのことと理解することができます。嵯峨本伊勢物語は、版本でありながら一点物の写本に近づくことを意図して製作されたと考えられるのです。その目的のために行われたと考えられる、ちょっと信じられない特徴が、伊勢物語のみならず方丈記などにも存在していることが知られています。

慶長十三年刊の伊勢物語は、すべての本に相違があることが報告されています。紙の裏表となる、現在の二頁分の活字を組んで一回だけ刷り、その二頁内に存する同一文字を二つ選んで活字を入れ替えたり、単語を一つ選んで抜き取り、同じ単語を別な活字で組むなどして、本文は変わらないのに活字が異なるというような面倒な作業を、多数の箇所で行っていることが確認されたのです。

同じ版本を見比べることは普通はしませんから、この手間のかかる面倒な作業は、誰にも気付かれない可能性の高い自己満足の努力といわざるをえません。それをあえて行ったのは、版本という存在をどこまで写本に近づけられるかに挑戦したからではないでしょうか。それは他ならぬ角倉素庵の意図したことであつたはずですが、

慶長十三年中の刊行で、也足叟の自筆花押のあるもののみが素庵が刊行したもので、それ以外は模倣版である可能性も指摘されています。嵯峨本伊勢物語は後代への影響力が大きいのですが、やはり今もなお謎多き存在でもあるのです。存義のものも含めて、これだけの数と種類の嵯峨本伊勢物語を見比べられるのは、飯沼観音圓福寺のコレクションだけです。その贅沢を存分に味わってください。

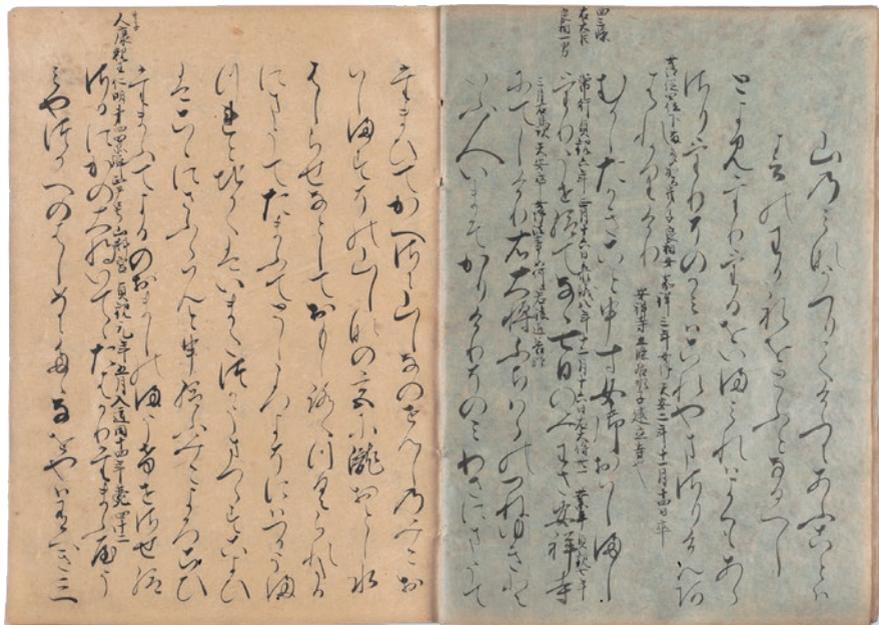
伊勢物語新刊物余需勘按邦京抄英
 門一甲之奥書云此物語之根源在人之語
 不同之由今以天福年取被高孫女書之
 然之於恐之訂按之送少也又圖書卷中
 之語分以爲上下卷雖不足動好女人情
 取爲之悦推書眼月而已

慶長戊申仲夏上院

也足野



角倉素庵が刊行したと考えら
 える嵯峨本の一群中で、刊年
 が明確で、挿絵があることな
 どから、代表的存在とされる
 のが伊勢物語である。下冊末
 尾の刊語は、筆跡からも也足
 叟こと中院通勝（一五五六—
 一六一〇）が版下を記したこ
 とは明らかで、その名の下に
 ある花押は墨色が異なり、通
 勝が自ら書き入れたものと考
 えられる。平仮名書きの古典
 作品で最初に挿絵が加えられ
 た冊子体版本として、日本の
 書物史上の記念碑的存在であ
 る。上冊表紙右肩に「相応院
 様御物」と墨書があり、徳川
 家康側室で名古屋藩祖・徳川
 義直母の旧蔵と考えられる。
 素庵と義直は交流があったこ
 とは確かであり、両者のつな
 がりの深さを示す資料となり
 うる存在である。アメリカの
 コレクター、ロナルド・ハイ
 ドの旧蔵本である。



10

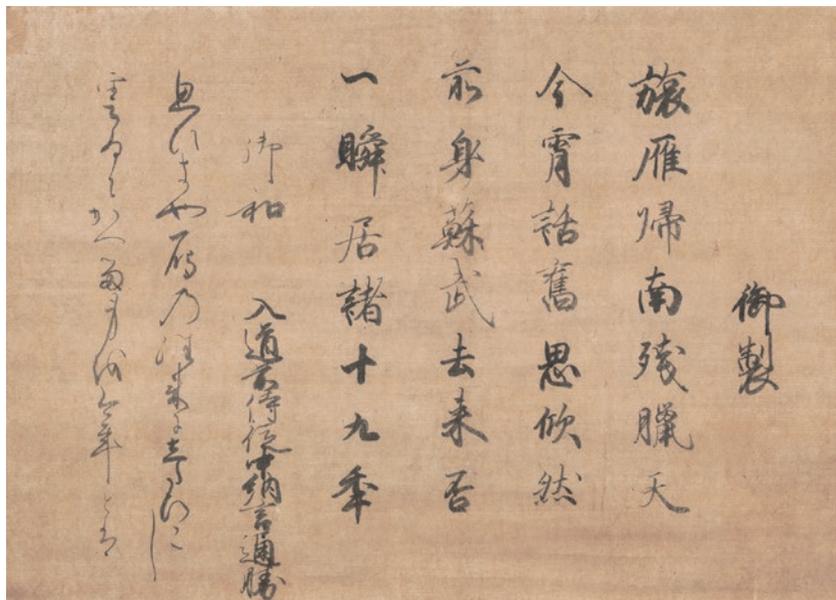
伊勢物語

〔室町中後期〕写 伝平田墨梅筆
綴葉装1帖

後補白茶色地獅子丸宝尽文緞子表紙
(25.3×17.7cm)。銀砂子散し地に菊籬文を
描いた見返しとともに江戸時代のもの。
4色色替鳥の子料紙。

半葉9行で字面高さ約21.6cm。

定家本系の天福二年本・根源本・武田本の本奥書を列記するのみで書写奥書はない。江戸期の畠山牛庵が平田墨梅と鑑定した極札を貼付する。墨梅は室町中期の公家歌人で能書家としても名のあつた、飛鳥井雅親(法名栄雅、一四一七—九〇)の門弟で、右筆的存在であつたと考えられる人物である。墨梅筆と伝わる栄雅流の書風を示す写本や古筆切は少なくなく、その多くは同筆であるので、それらと同じ筆跡であるこの本も墨梅の真筆である可能性は高い。平安時代に流行した、色替料紙の豪華写本の流れを受け継ぐ室町期写本として注目できる珍しい存在で、このような写本の存在が、嵯峨本伊勢物語を色替料紙で仕立てることに影響を与えた可能性は高い。



11
詩歌懷紙
〔慶長4年(1599)〕
中院通勝筆 1幅
紙本墨書(36.7×51.6cm)。

中院通勝は内大臣・通為息で、正三位権中納言に至ったが、官女との密通事件により正親町天皇の勅勘を被つて丹後に追放された。田辺城主・細川幽齋のもとに身を寄せて、幽齋より歌学や古典学を学び古今伝授を受けたことにより、当代屈指の古典学者となるに至った。幽齋の教えを記し留めた耳底記、中世期の源氏字を集大成した岷江入楚などを著している。これは、勅免を受け出頭した慶長四年十二月七日に後陽成天皇より賜わった七言絶句と、それに和した自詠を通勝自ら清書した懷紙であり、漢字仮名共にその筆跡の特徴を把握するのに適した資料である。嵯峨本伊勢物語の刊語と比較すれば、その版下が通勝の手になることは明らかである。翻刻…「御製／旅雁帰南殘臘天／今宵話旧思欣然／前身蘇武去來否／一瞬居緒十九年／御和入道前侍從中納言通勝／思ひきや雁の往来にしたひこし／雲ゐにかへる身を今年とは」。



12
伊勢物語 2巻

慶長13年刊
嵯峨本古活字第1種
袋綴装2冊

後補刷毛引表紙(27.0×19.5cm)。

中央題簽剥落痕。

色替具引紙料紙(他に比し色数少ない)。

無辺無界(高22.0cm)9行18字基本。

嵯峨本伊勢物語は版種の多いこと有名で、圓福寺には様々な種類が揃っているが、同版種が複数存在する点でも注目できる。この伊勢物語は、活字を組んで一枚刷ると、本文は変えずに一部の活字を差し替えて刷るという作業を繰り返して、全く同一のものが存在しないようにしたことが知られている。この「部分異植字」を見比べて確認できるのは非常に贅沢なことであるといえる。また誤植訂正においても、9は当該部分を切り抜いて裏から紙を貼り、正しい文字の活字を印刷のように捺すという朝鮮版由来の方法を採るが、こちらは胡粉で塗り潰した上から捺している。また他の本で、四角く切り抜かず、丸くちぎるようになった例も見いだせる。この伊勢物語は様々な面で一点限りのものなのである。



甘くおとこつらと此よりへいさむらわ
 恒よりこのちり恒若乃所とす見よ
 乃大海をゆくたれとたれも海に於てあり
 舟はたてておとこつら人の入るる
 欠とつら

かわが欠て着のはふ所と缺はあせと
 雪乃うみとつらみよりのえま
 とつらむらむらハ見ふひとくよ海はなわ
 可なり

伊勢物語新刊校余需勘校於其後
 門一守之奥書云此物語之根源在人々
 不同也如余以天福寺取被志孫女書
 卷之程恐有訂校之送大也又圖書卷中
 之卷分以卷上下卷離不足動好女人情
 願為之悦推幸服目而已

慶長戊申仲夏上流

也足野



13

伊勢物語 2巻存上

[慶長13年]刊 嵯峨本古活字第1種
袋綴装1冊

後補白茶色地雲母刷表紙(26.8×19.2cm)。

色替具引紙料紙。

無辺無界(高22.0cm)9行18字基本。

濁点等朱筆書入。

慶長十三年に刊行された嵯峨本伊勢物語は人気があり、同年中に新たに作った活字を追加して再び刊行されたことが知られている。またその再刊本にも甲乙の二種があることも報告されている。圓福寺には第一種で二冊揃ったものが二点、上冊のみのものが二点も確認できる。12で紹介した部分異植字の状況を四点で確認できるのである。この本は再刊本(第二種)の下冊と取り合わされており、最初から揃いであったと思わせるために同一の表紙に改められている。第一種と第二種の識別方法として知られるのが、上冊二十七丁裏、下冊十七丁裏の挿絵の匡郭の欠損の有無の確認である。当然欠けがあるのが第二種である。この上冊には欠けがなく、14の下冊には欠けが確認できる。



14
伊勢物語 2巻存下
〔慶長13年〕刊 嵯峨本古活字第2種乙
袋綴装1冊

後補白茶色地雲母刷表紙(26.8×19.2cm)。
色替具引紙料紙。
無辺無界(高22.3cm)9行18字基本。

13と取り合わされた下冊であるので、こちらには朱筆濁点の書入れは存在していない。十七丁裏の挿絵の匡郭右辺に欠損をはっきりと確認できるので第二種と確認できる。甲と乙の分類については、画像がインターネット公開されている甲の早稲田大学図書館蔵本、乙の京都大学図書館蔵本と比較するのが簡便である。両者は共通性が高いので、複数個所で確認する必要がある。この本は乙であり、圓福寺には甲の下冊も存在している。慶長十三年のものは第一種も第二種も下冊末尾の刊語の「也足叟」部分に通勝が自ら手書きで花押を書入れていることで有名であるが、圓福寺には両種合わせてこの花押が四点も存在するのである。このコレクションが尋常ならざるものであることを容易に理解できるであろう。



15

伊勢物語 2巻存上

〔慶長13年〕刊

嵯峨本古活字第2種乙
袋綴装1冊後補薄香色地木版雲母汩繁文
刷表紙(26.8×19.1cm)。後補中央鳥の子地金泥草雲霞
文題簽「伊勢物語上」。

色替具引紙料紙。

無辺無界(高22.0cm)

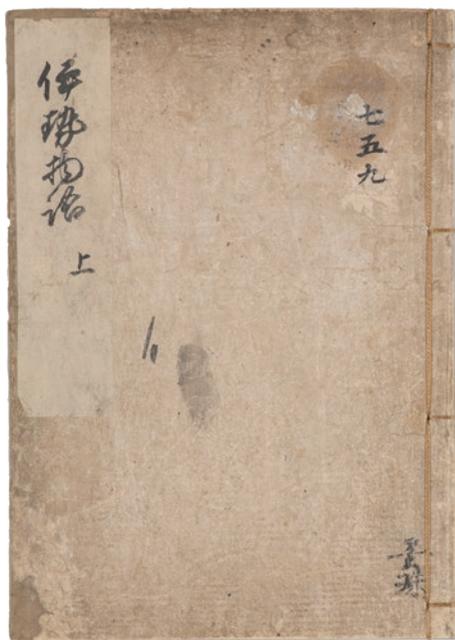
9行18字基本。

第二十七丁裏の挿絵の匡郭
左辺に欠損があるので第二
種と判断でき、京大本との
比較で乙と判定できる。圓
福寺藏本の第二種乙の上冊
はこの本のみである。



16
 伊勢物語 2巻存上
 [慶長元和頃]刊
 模嵯峨本古活字第2種甲古活字
 袋綴装1冊
 白茶色地木版雲母[丸錦文]刷表紙
 (27.7×19.3cm)、
 裏表紙新補白茶色地雲母刷。
 左肩題簽剝落痕。
 色替具引紙・染紙料紙。
 無辺無界(高22.0cm)9行18字基本。

慶長十三年刊の伊勢物語は大変人気があり、第二種本の他に、第二種本を利用して版木を製作した覆刻整版本も刊行されている。そればかりではなく、第二種甲を模した古活字版まで存在するのである。ケンブリッジ大学図書館蔵のサトウ、アストン旧蔵の二冊本 (<https://cuclib.cam.ac.uk/view/PR-EJ-007341/>) がそれで、刊語が覆刻されて通勝の花押も印刷されている。挿絵の版木も覆刻で微妙な劣化が認められる。圓福寺蔵のこの上冊は、綴じ目近くに「上(下)幾」との丁付が見える点でケンブリッジ本と共通し、同版の古活字版と判明する。謎の多い存在であり、今後の総合的な検討が必要である。具引紙と染紙を混用している。三井高堅旧蔵本。



17

伊勢物語 2巻存上 [慶長13年]刊
嵯峨本古活字第1種 袋綴装1冊

[転用] 白茶色地木版雲母〔丸錦〕唐草文
刷表紙(27.0×19.3cm)。

左肩後補素紙題簽「伊勢物語上」と墨書。
色替具引紙料紙。

無辺無界(高22.0cm)9行18字基本。

前半部振り仮名書入。表紙右下に「玄珠」
署名あり。

二十七丁目裏の挿絵の匡郭に
欠損がなく、第一種本と判明
する。18と一具とされている
が、版種も異なり明らかにな
り合わせであるので、それぞ
れ独立させた。未詳文庫印の
ほかに秋葉義之の蔵書印があ
る。



18

伊勢物語 2巻存下

慶長13年刊

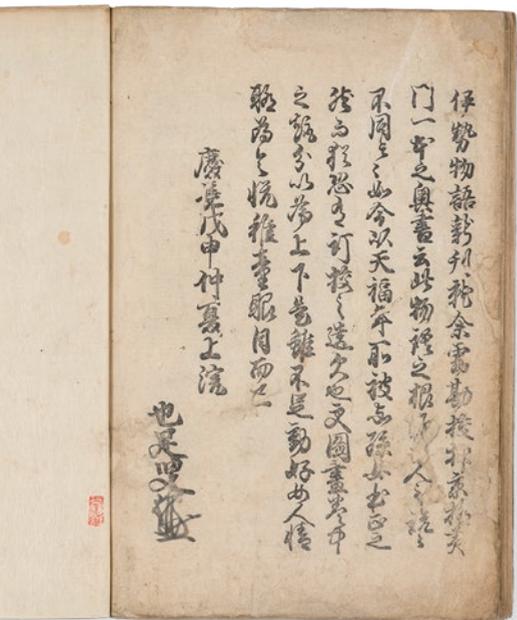
嵯峨本古活字第2種甲 袋綴装1冊

〔転用〕白茶色地木版雲母〔龍丸〕唐草文刷表紙
(27.0×19.3cm)。

色替具引紙料紙。

無辺無界(高22.3cm)9行18字基本。

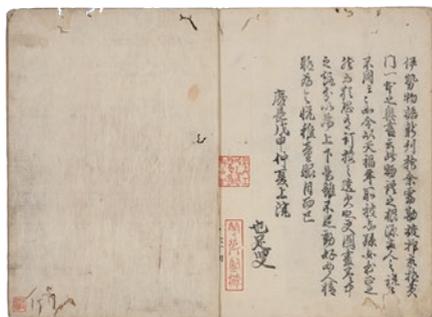
17と二種の蔵書印が共通し、かなり早い段階で取り合わされたものと思われる。下冊表紙には上冊にある「玄珠」署名がなく、左肩部分が傷んで補修されているなど、不自然な点が多く、別の本の裏表紙を転用している可能性が高い。十七丁裏の挿絵の匡郭右辺に欠損があり、早稲田大学蔵本と同版であるので、第二種甲であると判断できる。圓福寺には第二種甲の上冊は所蔵されていないが、下冊の甲乙は見比べることができるのである。



伊勢物語新刊秘余雷勅授本系於天
門一甲之奥書云此物種之根乃人云流
不用之也今以天福年所被志孫女書之
然之程恐之訂校之送之也又圖書本
之流之以上下各離不巨動好女人信
敬為之悦雅書取月而之

慶長戊申仲夏上院

也史



19
伊勢物語 2巻存下
〔元和寛永頃〕刊
覆嵯峨本古活字第2種甲
袋綴装1冊

茶色地不明文空押表紙(26.5×19.5cm)。
左肩題簽剝落痕。色替具引料紙。
無辺無界(高22.0cm)9行18字基本。

嵯峨本伊勢物語の人気の程を証明するのが覆刻整版本の存在である。第二種甲を版下を利用して刻んだ版木で印刷しており、活字版よりはるかに多い部数が製作されたと考えられ、見かけることも多い。挿絵の版木も新たに刻んでいるので、下冊十七丁裏の挿絵の匡郭右辺に欠損はないものの、線の太さにばらつきがあり、細かな切れ目も目立つ。末尾の刊語も覆刻しており、「也足叟」の後に花押がないのが見分けるポイントとなる。また料紙の色が古活字版より濃いと言われ、並べると納得できる。版權の意識などなかった当時のことでもあるので、素庵が関与しないものである可能性が高そうである。見返し左下部分に「とら」との墨書がある他、三井高堅の所蔵を示す三種の印が捺されている。



20
伊勢物語 2巻2冊
〔元和寛永頃〕刊
覆嵯峨本古活字第2種甲
袋綴装1冊

薄香色地木版雲母信夫草文刷表紙
(27.0×19.3cm)。

左肩に大きく「伊勢物語上(下)」と墨書されていたのを摺り消して、上から同文を墨書する。色替具引料紙。
無辺無界(高22.0cm)9行18字基本。

慶長十三年の古活字版の原表紙は信夫草文が雲母刷されていることが指摘されており、この覆刻整版本は表紙をも模したものとと思われる。下冊十七丁裏の挿絵を19と比較すると、匡郭のがたつきや切れ目も少ないので、こちらの方が早印と判断できる。上冊一丁目は後の模写である。両冊最終文字の下に「定」文字の丸墨印があり、また両冊裏見返しに「虎喝／(花押)」との旧藏者署名がある。三種の蔵書印の内判読可能な「尾張細／野氏記」は、幕末の尾張藩々儒・細野要齋のものである。



21

伊勢物語 2巻存下

慶長14年(1609)刊 嵯峨本古活字第3種
袋綴装1冊

後補転用栗皮表紙(26.9×19.3cm)。

白色地砂子散具引料紙。

無辺無界(高22.2cm)9行18字基本。

慶長十三年の第二種甲を元に、新しく彫った活字と覆刻した挿絵版木により刊行されたもの。新たに慶長十四年二月の刊語を付している。その内容の大半は十三年の刊語と重なるもので、もろろく 髣髴した老人の立場で書かれるものの、署名がなく誰のものとも分らない。その筆跡も通勝とは異なるやや稚拙なもので、素庵が関与したものと考え難い。他に六本が確認されている。刊語翻刻「伊勢物語新刊世酷多矣然京極黄門一本之奥書云此物語之根源古人之説々不同云々」而今以天福年所被与孫女本正之猶恐有字画之差互聊加訂校又函卷中之趣而分爲上下蓋爲令好事童蒙悦目也於戯予老懶衰情而不堪弁鳥焉豈無紙繆博治君子改匡焉幸甚／慶長己酉仲春上澣日。安田善次郎旧藏。

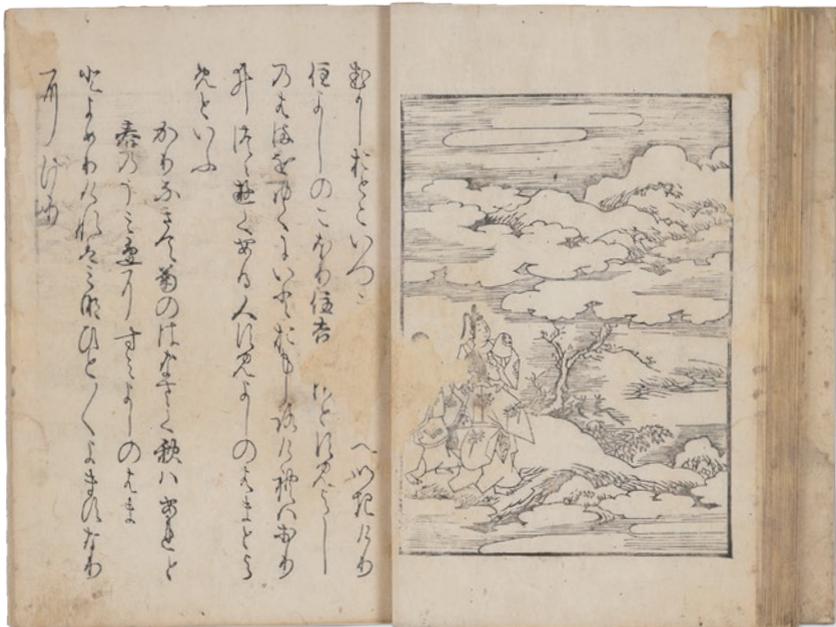


22
伊勢物語 2巻
〔慶長15年(1610)〕刊
嵯峨本古活字第4種甲
袋綴装2冊

香色地木版雲母信夫草文刷表紙(27.3×19.3cm)。

外題中央素紙刷題簽「伊勢物語 上(下)」。白色具引紙料紙。無辺無界(高22.2cm)9行18字基本。下冊刊語丁を欠く。

「嵯峨本伊勢物語」の人氣は衰えず、慶長十四年に続いて十五年にもまた新しい活字と挿絵版木を用いて、やはり十三年の第二種甲を元にしたものが刊行されている。この十五年版も三種あることが報告されており、最新の高木浩明氏の分類に従って説明したい。この本は甲種だが惜しくも刊語丁を欠いている。しかしながら、圓福寺藏の伊勢物語の中で唯一原表紙と原題簽を備えており、製作時の雰囲気伝えるものとして貴重である。刷題簽の「伊勢物語」の文字は、十三年の通勝刊語中のものと似通っており、通勝の筆跡を元にすると思われる。十五年版の甲種と丙種は、白具引紙のみを用いており、色替本ばかりの中にあつてある意味新鮮である。未詳者藏書印がある。



23
 伊勢物語 2卷存下
 慶長15年刊 嵯峨本古活字第4種甲
 袋綴装1冊
 後補転用鶯色地金泥小切箔下絵表紙
 (27.1×19.4cm)。
 白色具引紙料紙。
 無辺無界(高22.2cm)9行18字基本。

22と同じ慶長十五年版の甲種であるが、こちらは刊語を有している。その内容は、「中院也足軒素然」と通勝の名を出して十三年版について説明し、今またそれを元に本文を正して再び刊行すると述べている。十四年版についての言及がないことは、それとは直接的な関係がないことを物語っているのではないだろうか。またやはり署名もなく筆跡がかなり稚拙であることから、素庵が関与する可能性は低そうである。刊語翻刻「抑京極黄門一本之奥書云此物語ノ之根源古人之説々不同云々故去慶ノ長戊申仲夏之中院也足軒素然ノ以天福年所被与孫女本正之并加画ノ図卷中之趣分以為上下行于世矣ノ今亦以其印本正之再令流布世而已ノ慶長庚戌夏日。やや状態が悪く裏打補修が施されている。



24
伊勢物語 2巻

慶長15年刊 嵯峨本古活字第4種乙
袋綴装2冊

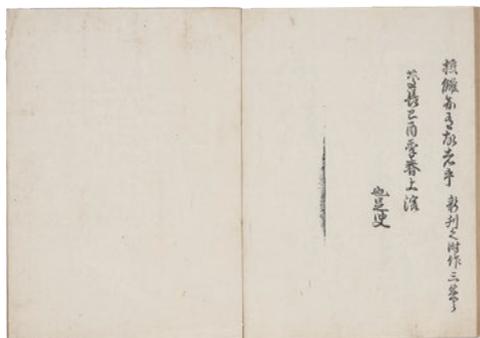
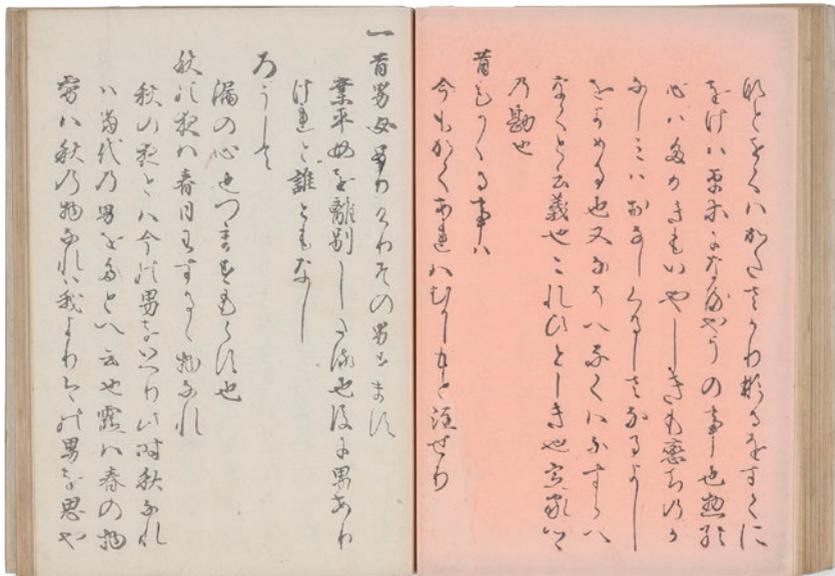
鳥の子色地〔萩〕雲霞文雲母刷唐紙表紙
(26.5×18.3cm)。

左肩題簽剥落痕の上に「伊勢物語」と墨書。

色替具引紙料紙。

無辺無界(高22.1cm)9行18字基本。

慶長十五年版の三種の内、唯一色替の料紙を用いるのが乙種である。国会図書館蔵本のみが知られる丙種ほどではないものの、この乙種も他に国文学研究資料館蔵鉄心齋文庫本と下冊のみの天理図書館蔵本が知られるのみである。甲種と乙種を比較できる圓福寺のコレクションは、比較することの重要性を理解して、意図的に収集されたものであることがよく理解できるのである。岡本閻魔庵、フランク・ホーレー、川口屋又次郎他の旧蔵本である。



25

伊勢物語聞書〈肖聞抄〉
宗祇講牡丹花肖柏録 3巻
慶長14年刊
嵯峨本古活字 無捺印本
袋綴装2冊

白茶色地木版雲母信夫草文刷表紙
(24.8×18.8cm)。左肩題簽剥落痕。
内題「伊勢物語聞書」。色替具引紙料紙。
無辺無界(高21.4cm)9行18字基本。

連歌師・宗祇そうぎの講義を弟子の牡丹花肖柏たんかしやうはくがまとめた注釈書で、原題簽を有する伝本は通勝の版下で「肖聞抄」とある。文明九年(一四七七)・十二年(一四八〇)・延徳三年(一四九二)の諸本があり、嵯峨本は文明九年本系統である。やはり也足叟通勝が監修をし、自筆版下の刊語を加えている。多種に分類されてきたが基本的に一版で、刊語に通勝による「素然」の号の自署と「自得」黒印があるかどうかの違いであることを、高木浩明氏が明らかにしている。署名の有無は通勝が慶長十五年三月二十五日に没することと関係している。なお自署のある国会図書館本は珍しい素紙刷である。刊語本文末に小字で「新刊之時作三策了」と、三冊で刊行したことを記すが、本書は中下冊を一冊で綴じている。衛川寅・芝川又右衛門旧蔵。

四、光悦が素庵が

右

る
ろ
ろ
ろ
ろ

ろ

左

ろ
ろ
ろ
ろ
ろ

宝

永七年（一七一〇）刊の中村富平編「弁疑書目録」中巻に存する「嵯峨本書目」は、嵯峨本に関する最古のまとまった記録として注目できるものです。「総テ嵯峨本ト云ハ。雲母ニテ。モヨウアルヲ以正トス」との記述は、嵯峨本の特徴を指摘し、複数の種類があることを伝えていて貴重です。無言抄や法華経・臨池鈔など、現在の認定には含まれない書名が見えるのも興味深いところでず。

「謡本」の説明に、「此ノ書ヲ以テ。角ノ藏本ト云フ。或ハ光悦本ノ謡トモ云フナリ」とあり、古今集と歌仙について、「此ノ二書ハ。素庵ト光悦トノ。筆迹ヲ以テ。印本トス」とある他、謡乱曲と二十四孝についても、「此類書二角ノ藏素庵ノ自筆ノ印本スクナカラス。此ノ版今ニ嵯峨ノ角ノ藏ニアリ」との注意される記述があります。刊行一世紀後には、嵯峨本の筆跡は素庵と光悦の二人のものがあると考えられていたことが判るのです。

現在でも、嵯峨本には光悦の協力があつたとする見解が一般的ですが、それを否定し、素庵一人の筆跡との見解を示したのは、二〇〇二年に大和文華館で開催された、特別展「没後370年記念角倉素庵―光悦・宗達・尾張徳川義直との交友の中で―」を、中心になって企画された元同館学芸員の林進氏です。この展示図録には、貴重な資料が数多く集められており、嵯峨本を考える上でも極めて重要な参考書であるといえます。現在のところ、林氏の説は広く浸透しているとはいいいがたい状況ですが、検討しなければならぬ大きな課題となっています。

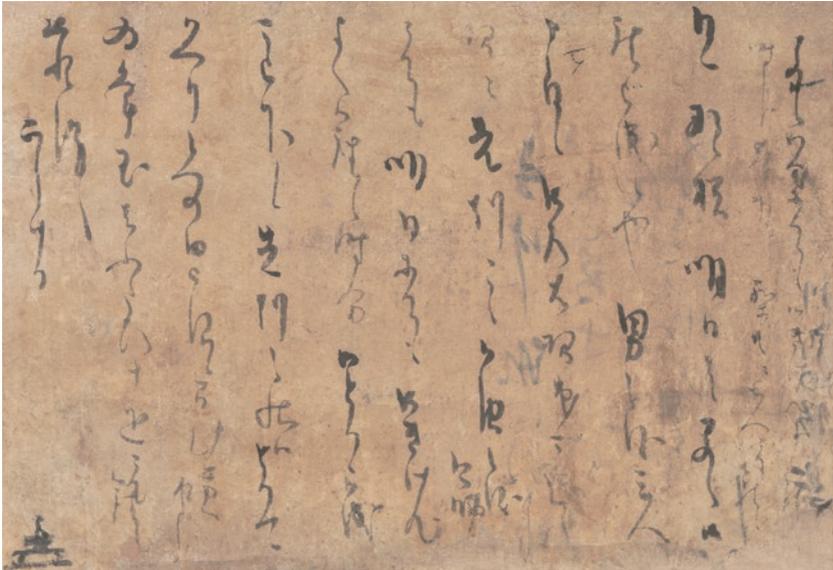
筆による書の練習を「手習い」といいますが、それは「手做い」、つまり手本の筆跡を真似る訓練でもあります。こうして書風は継承され、書流というものが形成されました。伏見天皇と後伏見天皇、三条西実隆と同公条は、よく似た字を書くことで有名な親子です。また飛鳥井雅親と足利義政、飛鳥井雅康と足利義尚の筆跡が良く似ているのは、歌道の師弟関係であつたことに関係しています。藤原定家のように影響力のあつた人物は、子孫だけでなく、かなり後代の人物迄もが憧れてその筆跡を真似ています。

「手做い」が広く行われていた時代には、筆跡を流派で分類することは有意義な方法だったので。江戸時代の古い筆跡を愛好する風潮の中で登場した筆跡鑑定家達は、平安時代以来の書を流派で分類し、それに属する人名を列挙した「書流系譜」を複数編纂しています。今日の目から見ても、これらの分類は妥当と思われる部分も多く、利用価値の高い資料であるといえます。

元禄七年（一六九四）に刊行された、『万宝全書』ばんぼうぜんしよ全十三巻の第五巻にある「本朝古今名公古筆諸流」は、良く知られた書流系譜ですが、その二十八種に分類された書流の二十五番目として「光悦流」が見え、本阿弥光悦を含めて十七名の名が挙っています。公家に続く弟子の最初に、「角倉与市玄之スミツクラ（マヤ）光悦流随一也自から一風有仍ヨツ与市流或角倉流と称す法名蘇庵（マヤ）といへり」と、素庵が特に詳しく説明されています。門弟随一の存在から独立して、「与一流・角倉流」と呼ばれるようになったというのです。素庵の筆跡が変化したようにも読める記述ですが、「随一」というのですから、見分けがつきにくい程、光悦に似た字を書ける人物であったことは確かそうです。近衛信尹このまのぶなた（一五六五—一六一四）・松花堂昭乗しゅうかうどうしやうじやう（一五八四—一六三九）と共に「寛永の三筆」と謳われた程の能書家であった本阿弥光悦は、現在でも非常に高く評価されていますが、素庵は嵯峨本の刊行者として注目されるのみで、書家としての認知度はかなり低いのが現状です。光悦の筆とされる資料は数多く存在していますが、当時流行の書風だけに、その内のどれが真蹟なのかを見極めるのはかなり困難です。素庵筆とされるものは多くはないのですが、やはり光悦の筆跡によく似たものばかりで、よほどの根拠がなければ素庵筆と判断するのはためらわれます。先述の「角倉素庵」展の図録でも、署名のある書状を除く書籍や短冊などの資料は、「素庵筆（推定）」とあるものが殆どであることが、真筆と証明することの難しさを物語っているようです。

素庵は光悦流の名手であったのですから、嵯峨本の筆跡を素庵の手になるものと見る説は、魅力的で説得力もあります。しかしながら、京都・光悦寺蔵の素庵宛光悦書状の存在にも明らかなように、両者には書の子弟である以上の親密な交流があったことも確かなのであり、確かなものだけでも十点を超える嵯峨本に、光悦が全く関与しなかったと断定することもためらわれるのです。

容易に結論を出せる問題ではないので、本展覧会では、光悦と素庵の筆跡とされる資料を、書状も含めて複数並べてみました。各種嵯峨本とじっくり見比べて、ご自身の見解をまとめてみてください。説得力のあるご意見をお聞かせいただけますと幸いです。



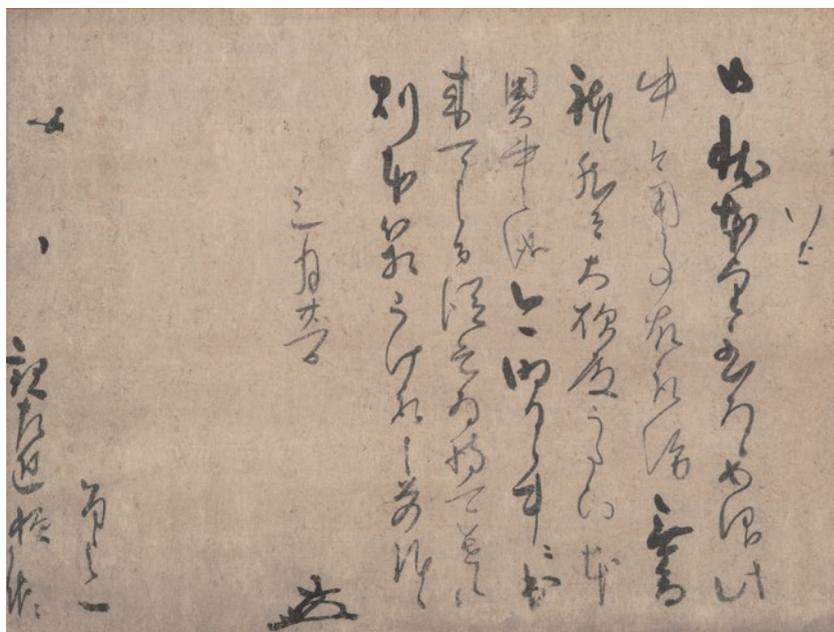
26

〔川辺新四郎〕宛書状

〔江戸初期〕角倉素庵筆 1幅

紙本墨書(31.3×41.7cm)。

端裏書に「川新四」とあり、書状に
 関する記述が見えることから、『本
 光国師日記』元和元年（一六一五）
 十月二十四日条に見える飛脚間屋
 であつたらしい「川辺新四郎」宛
 と考えられる。具体的な内容は不
 明だが、正月で「年玉」が見えるの
 は興味深い。署名のある信頼度の
 高い素庵書状の花押との差異は
 気になるが、貴重な花押例として
 注目できる資料である。翻刻「且
 那樣、明日者早々御／座成被成候
 や。男之外三人／申付候。御左右
 次第可進候。／次に先刻之御報之
 儀、今晚／にても明日にても御き
 けん／よく御座候時分、御とり被
 成／可被下候。先刻の状はとりて
 ／かへり候への由被仰候間、此方
 へ返申候。／為年玉はふたひ十足
 にて御座候。／恐惶謹言。／尚々
 御用にても御きけんよく／御座候
 時分、□□□、我等共に七人にて
 御座候。かしく。／正月二十日
 （花押）」



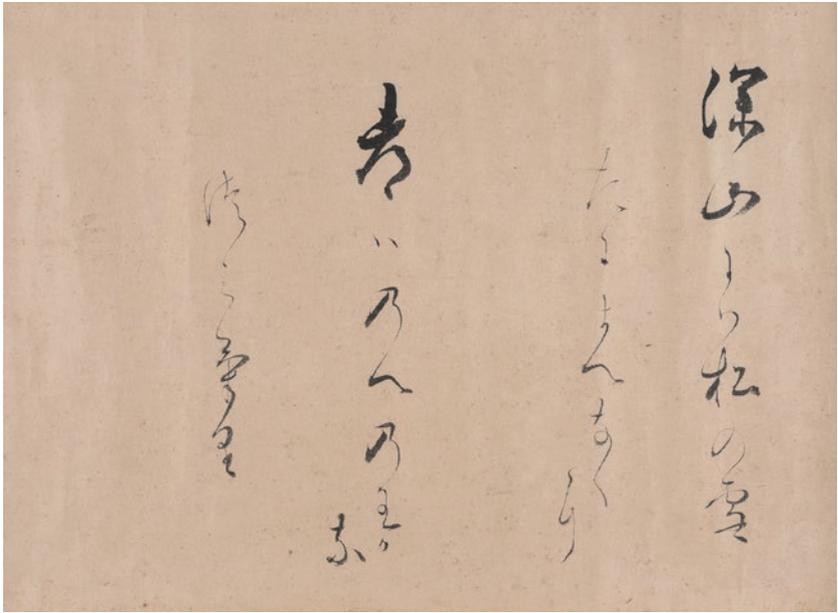
27

観世黒雪宛書状

〔江戸初期〕角倉素庵筆 1幅

紙本墨書(29.7×43.2cm)。

角倉素庵が、徳川家康愛顧の能楽師の観世左近大夫黒雪（身愛）（なつか、一五六六—一六二六、宗家九世）に宛てて、「大炊殿（おおいのかみ）（将軍秀忠側近の大炊頭土井利勝であろう）から依頼を受けていた謡本に奥書を加筆して、今日明日中に届けさせる旨を記したものの。利勝の大炊頭任官は慶長十年（一六〇五）四月二十九日であり、それ以降のこととなる。色替りの大柄文の唐紙料紙に書写された、慶長十年や十一年の観世身愛奥書のある、素庵筆と推定される謡本が国立能楽堂や大和文華館などに所蔵されており、素庵が黒雪の依頼で謡本の書写を行っていた可能性は高く、この書状もそうした書写活動に関係するものと思われる。翻刻「御状、本望の至りに存し候。如仰此／中は用事故取紛、無音／鉢候。然ば大炊殿うたひ本／奥書之儀、今明日之中に出／来可申候間、従是為持可遣候／則本箱うけ取申候。恐惶謹言。以上。／三月廿一日（花押）／角与一／観左近様御報」。



28

〔古歌卷〕

〔江戸初期〕写 伝本阿弥光悦筆
卷子装1軸

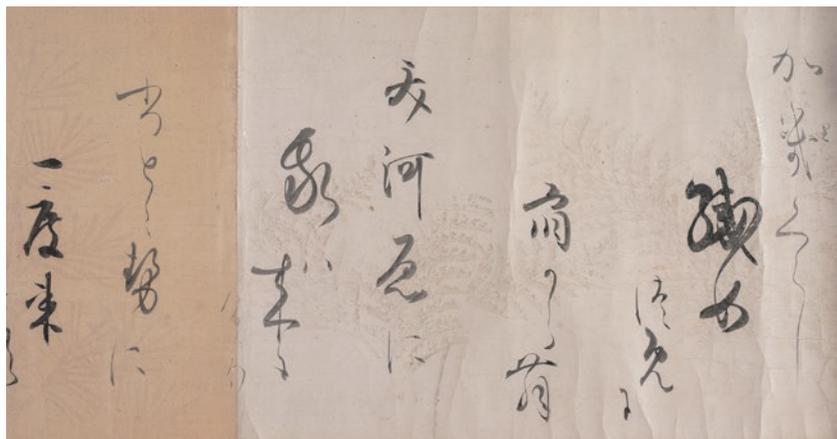
後補白茶色地雲龍文金襴(高27.8cm)。

料紙奉書紙。字高約22.0cm。

外題位置に古筆了佐極札貼付、

正保2年了佐鑑定奥書。

刀剣の研磨と鑑定を家業とする本阿弥家に生まれた光悦(一五五八—一六三七)は、書道に限らず陶芸・茶道などで幅広く活躍した。書は近衛信尹・松花堂昭乗と共に「寛永の三筆」と称されている。これは古今集の有名な春の歌六首を優美に散し書きにしており、豪華な装飾紙を使用していないことからすると、鑑賞用というよりも書道の手本用か。光悦流の書は大流行したので、よく似た筆跡や偽物も大変に多いが、末尾に筆跡鑑定家の祖で光悦と交流もあった古筆了佐(一五七二—一六六二)が、正保二年(一六四五)二月上旬に加えた鑑定奥書もあり、真筆である可能性が高い。古い桐箱の新しい中蓋に、書家・田中塊堂(かいどう)九六一—一九七六)が、「大虚庵光悦哥卷六首一卷」と墨書している。



29

〔古歌卷〕

〔江戸初期〕写 伝角倉素庵筆

卷子装1軸

砂色地梅枝紋緞子表紙(高さ24.8cm)。

見返布目金紙。

色文様の異なる唐紙6紙継(1紙幅約34.5cm)。

裏打紙は具引地に金小切箔・野毛散し。

古い桐箱蓋に「角倉與一筆」とあり、

その裏に「角倉与一入道素庵」と鑑定した

朝倉茂入極札を貼付。

信夫草や榎、めひしばなど嗟
 峨本で多く見かける文様を木
 版雲母刷した、落ち着いた色
 合いの唐紙に、丸みを帯びた
 大ぶりの文字で、古今集巻九
 羈旅部の歌五首を大胆に散し
 書きしている。瀟洒な光悦流
 の文字であることは疑いない
 が、二十八番の光悦筆の可能
 性の高い書巻と比較すると、
 太い線に力強さがあり、素庵
 筆とされるのも納得できるも
 のがある。書き出し部分で、
 「かきくらし」と続けて書い
 てから、「き」を見せ消ちし
 て「り」に改めているのは面
 白い。五首で完結したものが
 どうかは不明である。



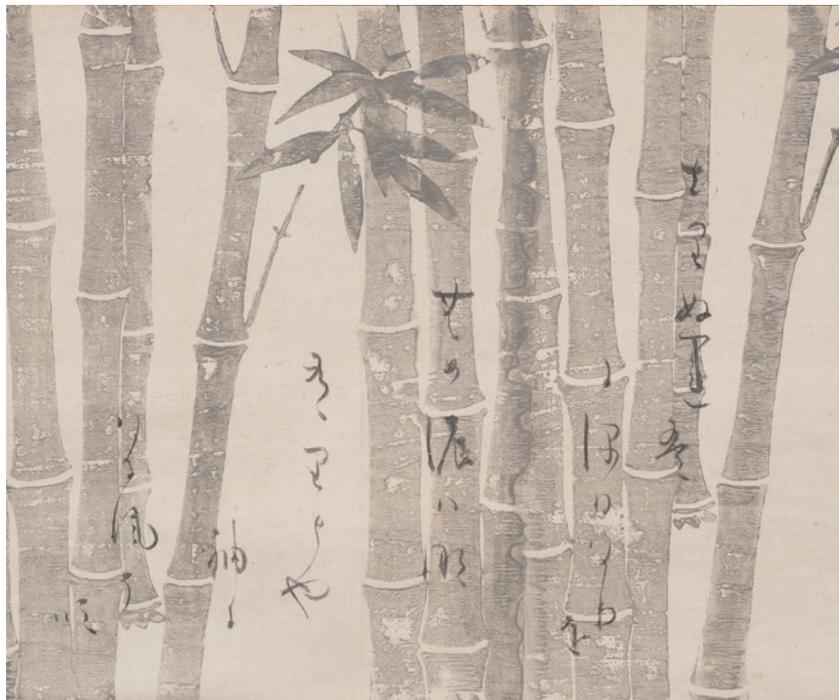
30

木版下絵和歌巻断簡

〔江戸初期〕写 伝本阿弥光悦筆 1幅

白具引地藤・信夫草金銀泥摺文料紙
(33.7×44.2cm)。

光悦墨印を有する新古今集を抜き書きした卷子本の断簡で、真筆の可能性が高い。金銀の泥を用いて上部に藤を、下部に信夫草の紋様を摺り出した瀟洒な料紙に、図柄とのバランスに配慮しながら余白をたつぷり取って、巻十六雑歌上の「菅贈太政大臣」(道真)歌を散し書きにした、芸術性の高い優品である。太い線と細い線の差異が際立っており、下句冒頭の「雪につゝめる」部分の繊細さは光悦の独壇場であろう。二重箱の外箱に「安田家／藤田家」伝来」とあり、藤田伝三郎旧蔵で二代目安田善次郎に伝わった「光悦歌巻」の断簡と判明する。二重箱の箱書は京都帝国大学教授・吉沢義則筆である。「非心齋蔵」とある整理票より法学者・幸節静彦旧蔵と判明する。翻刻「谷ふかみはるの／ひかりの遅／けれは／雪につゝめる／うくひすの／声」。



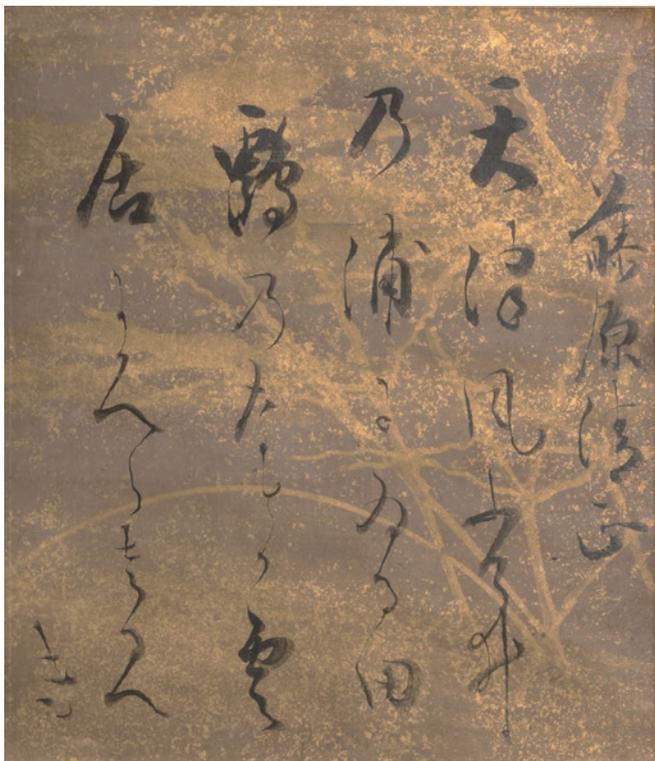
31

木版竹下絵和歌巻断簡

〔江戸初期〕写 伝本阿弥光悦筆 1幅

白色具引地竹文雲母刷料紙
(33.8×40.4cm)。

竹の文様は江戸初期頃に好まれ、光悦筆とされる古歌巻や嵯峨本などでしばしば見かけるものである。この断簡は光悦謡本の「四本細竹」文とよく似ている。光悦筆とされる裝飾料紙の古歌巻には、新古今集の抜き書きが目立ち、本幅も同集卷一春上の藤原有家歌を散し書きしている。やはり長尺の巻物から切り出されたものと思われる。光悦の古歌巻の筆跡は、筆の肥瘦や文字の大小にメリハリがあり、音楽性が感じられるものが多いが、これは全体的に文字の太さや大きさが均一で、やや重い印象がある。とはいえ、下絵の構図を十分に意識した文字配りがなされており、芸術性は高い。箱書はセンチユリー赤尾コレクションの形成に貢献した小松茂美の平成元年のものである。翻刻「ちりぬれは／にほひはかりを／むめのはな／有りとや／袖に／はる風そ／吹」。



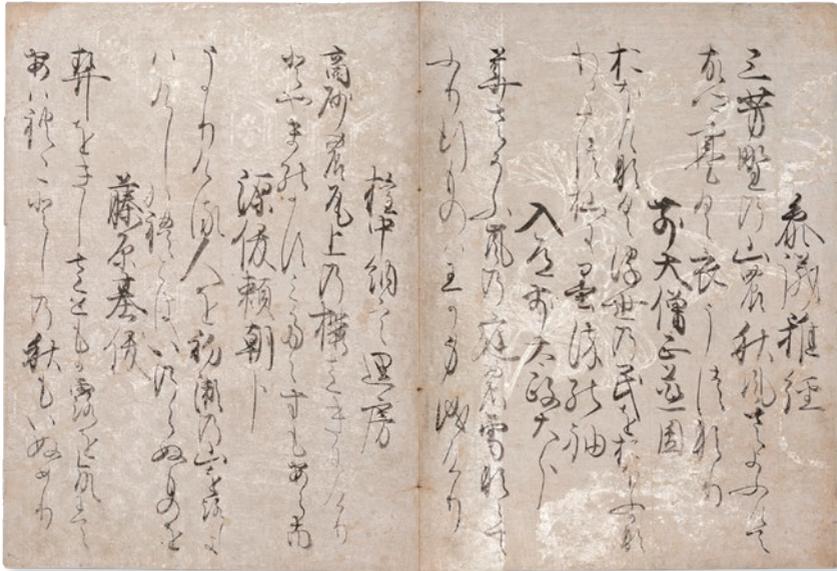
32

古歌色紙

〔江戸初期〕写 伝本阿弥光悦筆 1幅

桑茶色地金泥めひしば文金砂子散し色紙 (19.9×17.4cm)。

江戸時代には豪華な料紙の古歌色紙が大流行し、三十六歌仙や百人一首などの色紙の折帖や屏風が多く製作された。これもそうしたセットのもの一枚か。具引地に金箔や金泥でところ狭しと飾るのは江戸初期頃の流行で、光悦の色紙として著名な、五島美術館やベルリン国立博物館蔵の宗達下絵色紙のような特別なものではない。三十六人歌合や新古今集巻十八雑歌下に見える藤原清正歌であるが、作者も記されていることからすると、三十六歌仙色紙である可能性が高そうである。色紙の書式に則った光悦としてはおとなしい字配りながら、二度出てくる「乃」の書き分けが面白い。鑑定書などではなく、文化財の調査と保護に活躍した田山方南の昭和五十二年の箱書に「光悦色紙」と記されるのみ。翻刻「藤原清正／天津風ふける／の浦にゐる田／鶴のなとか雲／居にかへらさるへ／き」。



33

百人一首断筒

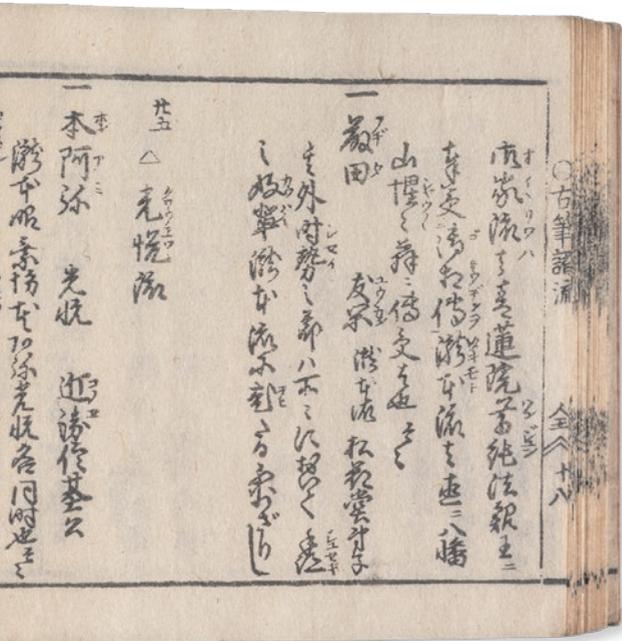
〔江戸初期〕写 伝本阿弥光悦筆 1紙

白色具引地木版雲母文刷料紙

(24.0×35.6cm)。

半葉9行、字高約21.4cm。

綴葉装であったことを示す綴穴が四つあり、左半が右半に先行する歌であることから、元は一紙の裏面であったと分かる。通常左右の文様は共通するはずであるが、右半は朝顔かと思われ文様で、左半は花亀甲繫文様と異なっている。共に嵯峨本中には見えない文様のようである。紙背に光悦筆と書き込みがあるのみで、鑑定書などは附随しない。昭和美術館蔵の宗達筆とされる下絵に書写された「小倉山荘色紙和歌五首切」などと比較すると、肥瘦のめりはりがなく、文字も全体的に細く尖った印象が強い。東京国立博物館蔵の素庵筆百人一首とも距離があるが、東洋文庫・龍門文庫に蔵される、色替りの唐紙で綴葉装の嵯峨本百人一首が、このような綴葉装写本を意識して製作された可能性を示す存在として注目できるのではないだろうか。

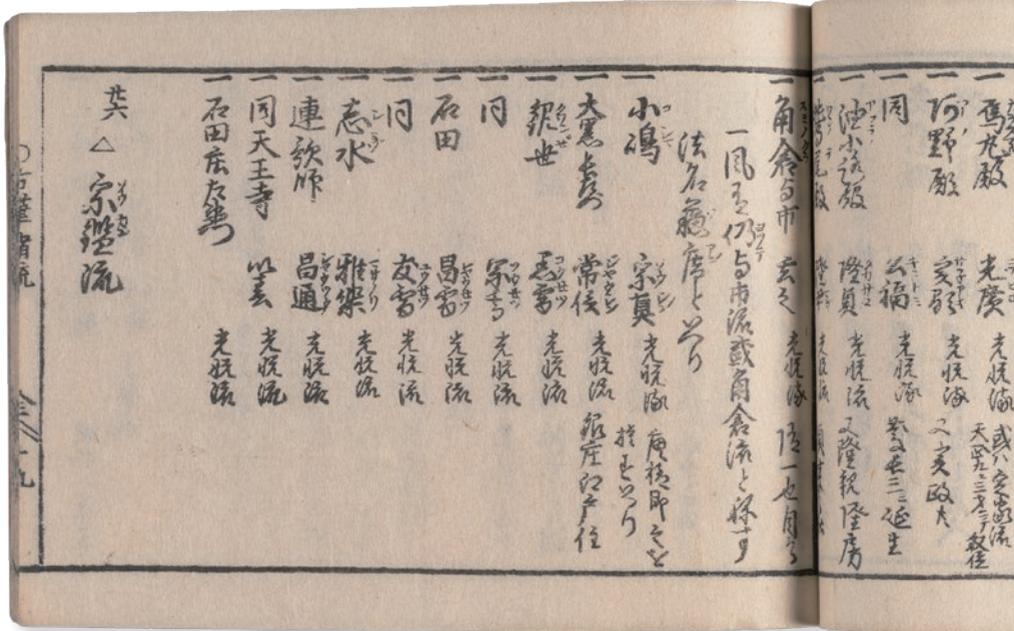


具引地に木版雲母文様刷の料紙は、嵯峨本に多く見られるものであり、信夫草の紋様も嵯峨本伊勢物語の表紙を始めとして使用例が少なくないものである。古筆見・平塚平兵衛は伝未詳で活躍時期も明らかではないが、その極札には「角倉素庵」と記されている。和歌短冊は一首二行書きが原則で、題と作者がなく二行目を一字下げにするのは古歌であることを示す。この歌も新古今集巻一春歌上の読人不知歌で、伝光悦筆の古歌に新古今集歌が目立つことも関係しそうである。光悦筆とされる古歌短冊と比較するとややおとなしい書きぶりであり、料紙からも素庵真筆である可能性は高そうである。翻刻「ふるさとに帰るかへるかりかねさよ深て／雲路にまよふ声聞ゆなり」。

34

古歌短冊

〔江戸初期〕写 伝角倉素庵筆 1枚
水浅蔥色地信夫草文雲母刷唐紙料紙
(36.2×5.7cm)。平塚平兵衛極札。



35

本朝古今名公古筆諸流(萬宝全書5の内)

[江戸中期]刊 横本1冊

渋刷毛引表紙(11.0×15.6cm)。

目録題「本朝古今名公諸流後学能書」。

古今和漢万宝全書は、書画・骨董・茶道具などの美術品に関する便利な工具書を集成した十三卷十三冊からなる古美術大百科的な本で、需要が高く初版の元禄七年(一六九四)以降何度も版を重ねている。その第五冊目は和漢墨跡印尽・本朝古今名公古筆諸流・古来流行御手鑑目録を収めた冊で、古筆研究に必需の一冊といえる。本作は、江戸時代の筆跡鑑定家が古筆の書風を二十八に分類し、流祖に続けて属する人名を列記したもので、現在でも有用性の高い資料である。その二十五番目に「光悦流」が見え、五人の公家に続いて、「角倉与市玄之」とあり、「随一也、自から一風有、仍与市流或角倉流」と称す、法名蘇庵といへり」と見えている。現在は書家としての認識の薄い素庵が、江戸前期中には、光悦流随一の書き手で、独自の風を会得して、与一流・角倉流の祖とされる程の評価を受けていたことを示す基礎的な資料である。

一 寸聖宣親坊の事

一 西行江口乃齋詠哥結り

付遊女於心漢事

一 宣方少年乃時詛誦作り結り

一 西行長谷寺系福に事

付西行旧女子所より

一 梵英偽邦の事

五、嵯峨本、いろく

飯

沼観音圓福寺蔵の嵯峨本コレクションの中で、伊勢物語は最大の点数を誇りますが、徒然草も意図的に異なる種類を収集したと考えられ、学術的にも注目できる存在です。嵯峨本と断言できるものが三点あり、これと密接な関係を有すると考えられるものが二点存しています。嵯峨本徒然草は川瀬一馬によって五種に分類されていましたが、高木浩明氏の最新の研究では、川瀬分類の第一種と第二種の差異の小ささから同種として、四種に分類しています。また小秋元段氏は川瀬分類第二種を欠番扱いしています。混乱が起きないように、ここでは小秋元氏方式に従うこととします。

圓福寺には、雲母で様々な模様を印刷した唐紙を使用した、最も豪華な第一種の上冊のみのもの、第三種の上冊と第四種の下冊を取り合わせたもの、第四種の上下の端本を取り合わせたものがあり、第一種本をもとした覆刻整版本もあります。そしてもう一つ、やはり上冊のみながら徒然草の最古版と考えられ、嵯峨本に先立って唐紙を用いている注目すべき一本も蔵されています。

嵯峨本に限らず、古活字版を含めた江戸初期の版本の研究に新たな知見を与えているのが、表紙を厚くするための裏張りとして用いられた反故まごへの注目です。表紙の裏紙に文書などの反故を使用することは、朝鮮版にも見られることで、その影響が想定されますが、江戸初期の版本や写本では特別珍しいことではありません。表紙屋のものと考えられそうな、書名と金額が列挙された帳簿の断簡も多いのですが、版本の反故である刷反故すまごは、製作に関する貴重な情報を与えてくれることが少なくありません。刊年が明らかでない古活字版の表紙に、ある作品の刷反故があった場合、それはその古活字版の刊行以前のものであるということになり、反故となった作品の成立の下限や、版本本体と刷反故の作品が同じ工房で製作された可能性を示しています。様々な工房の刷反故が集められるような場所があった可能性や、表紙は印刷後しばらくしてから付されることなどからすると、あまり図式的に判断するのは問題がありますが、情報の少ない古活字版製作の実態を伝える資料として、表紙裏の刷反故は実に貴重な存在なのです。

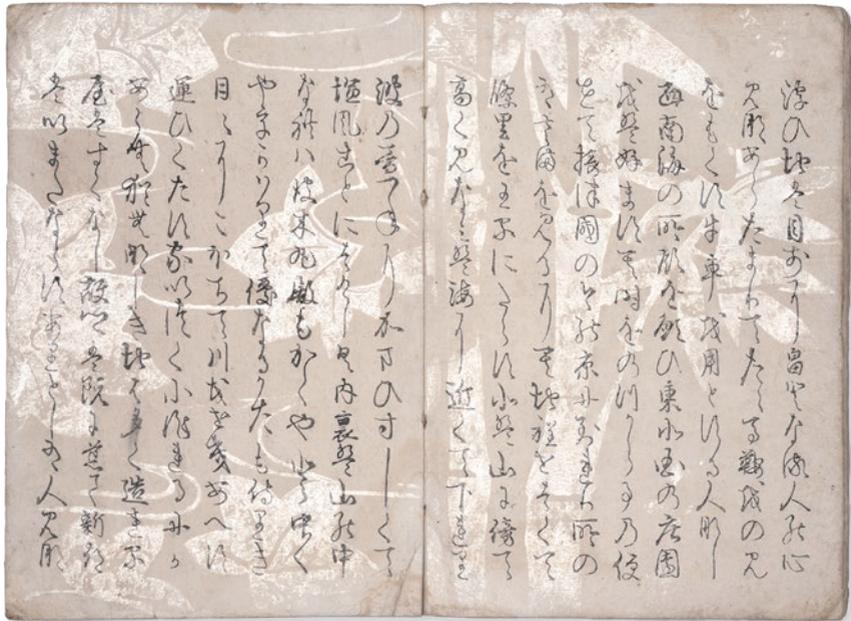
例えば、国立公文書館蔵の慶長十二年（一六〇七）の書入れが存在する史記の表紙から、嵯峨本徒然草の断片が発見されたことが報告されていますが、この事実は十三年の伊勢物語よりも前に徒然草が刊行されたことを教

えてくれるのです。古活字版の悉皆調査を進めておられる高木氏は、表紙の裏張りの刷反故を次々に発見されており、今後も驚くべき情報が増えることが期待できます。

嵯峨本の特徴として注意されるのが、当時の版本で一般的な袋綴装のものばかりではなく、その他の装訂のものもあることです。新古今集抄月詠和歌巻が卷子装であるのは特異な例ですが、高級な写本に用いられることが多かった綴葉装（列帖装）のものも少なくありません。仏教系の版本で見かけることはありますが、文学系の作品ではかなり珍しい存在であるといえます。光悦謡本の多くが綴葉装である他、百人一首と方丈記、そして久世舞の三十曲本と三十六曲本を加えることができます。袋綴装と較べてかなり手間のかかることが明らかかな綴葉装の版本を、かなり精力的に製作している事実は、嵯峨本の製作意図を考える上で小さくない問題だと思われれます。圓福寺には百点を優に超える光悦謡本の綴葉装本の他に、やはり唐紙を用いた方丈記があります。同じ装訂でも光悦謡本とは雰囲気異なっているように見えます。その違いの理由がなんであるのかを、一所で見比べながら考えられるのは、大変贅沢なことであるといえます。

伊勢物語・徒然草の他に同版種の二点を確認できるのが、歌僧・西行に仮託された仏教説話集の撰集抄です。一点が三冊本の上冊を欠いているとはいえ、二点あるのを不審に思われる方もおられるかもしれませんが、調査の際手に取った時に、この二点に違いがあることがはっきりわかりました。一冊多いことを割り引いても三冊本の方が重いのです。これは、その三冊本が、貝殻を原料とする白色顔料である胡粉を紙に塗った具引紙を使用しているのに対し、二冊本の方は特別な加工をしていない素紙を使用しているからです。高木氏の報告によると、撰集抄の素紙の本は具引紙の本よりも珍しいようです。本文の違いは確認されていませんので、見過ごされてしまいがちな違いですが、同一作品の版本を集めることの意義を教えてください。

このように同一作品を複数集めることは、極めて学術的な行為なのです。現物を具体的に比較できる環境はそうそう多くはありません。しかもそれが希少な嵯峨本となれば猶更です。圓福寺の嵯峨本コレクションはまさに奇跡の存在なのです。



36

方丈記 鴨長明著

〔慶長15年以前〕刊

嵯峨本古活字第1種本 綴葉装1帖

白具引紙共紙表紙(26.4×18.6cm)。

外題は左肩に打付で「長明方丈記」と後筆墨書。

白具引地種々木版雲母刷文料紙。

無辺無界(高22.0cm)9行15字基本。

方丈記の二番目に刊行された古活字版で、川瀬分類の嵯峨本第一種本である。これに先立つ袋綴装の「十行古活字本」は、小秋元段氏の近時の研究により角倉素庵が関与した「嵯峨本前史」のものと同位置付けられている。この本は、嵯峨本の百人一首・光悦謄本・久世舞などと同じく、版本として製作が面倒な綴葉装であることに加え、光悦謄本の表紙などと共通する模様版木を利用する点でも注目できる。同種の七本すべてにごく一部の活字の差し替えがあり、全く同一のものが存在しないことが報告されている。素庵筆の可能性の高い方丈記切や、同時代の唐紙を用いた綴葉装の方丈記写本なども発見されており、やはり写本に近づくことを目指した版本と言えそうである。本文の系統は版本で広まった広本系の流布本である。袋綴装の第二種本も存在する。フランク・ホーレー旧蔵。



37

徒然草 兼好法師著 2巻存上

〔慶長〕刊 古活字 慶長中刊10行本
袋綴装1冊

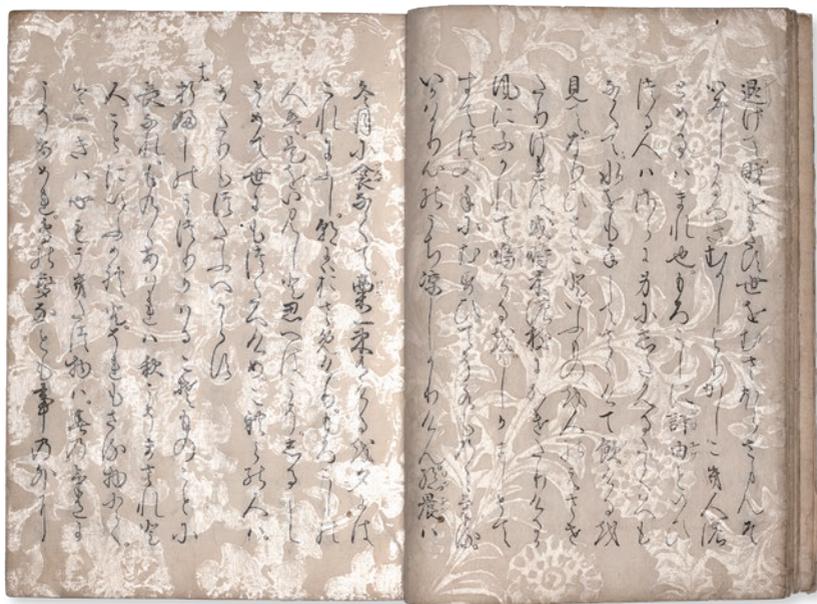
後補転用紺地金泥文表紙(26.7×20.5cm)。

色替り木版雲母刷文料紙。

無辺無界(高19.6cm)10行18字基本。

首尾欠。後筆の振り仮名あり。

徒然草は古写本が少なく、古活字版で刊行されて広く知られるようになった作品である。江戸時代人の嗜好に合致し、古活字版の仮名作品でも多くの版種が確認できる。これはその最古版と考えられるもので、伝本は少なく、安田文庫旧蔵本の他、国文学研究資料館蔵の三井家旧蔵本が知られる程度である。本書は『一誠堂九〇周年記念展示即売会目録』掲載された上冊のみの伝本である。光悦流ではないやや扁平の書体の特徴で、同じく慶長刊古活字の十行本の源氏物語と同種の活字であることを川瀬一馬が指摘している。嵯峨本とは異なる雲母文様は、技術の拙さ故か形状がはつきりせず、完成度の低さは否めないが、嵯峨本に先立つ先駆的な装飾古活字版として重要な存在である。



38

徒然草 兼好法師著 2巻存上

〔慶長8年以前〕刊

嵯峨本古活字第1種 袋綴装1冊

洗朱色地菱米印唐草文雲母刷表紙
(28.0×21.0cm)。

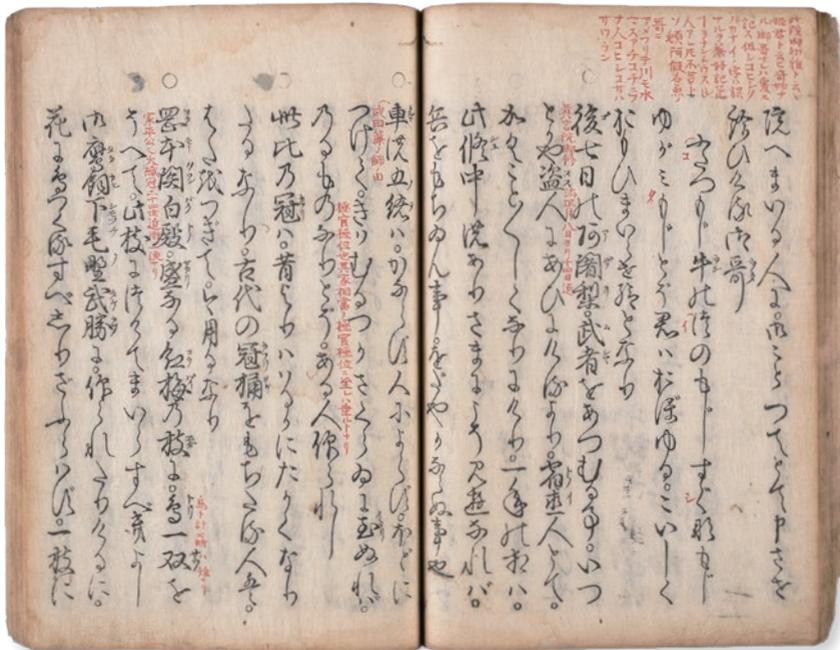
左肩布目地銀小切箔題簽(文字不明)。

唐草文雲母刷料紙。

無辺無界(高22.1cm)10行17字基本。

後筆の句点あり。

角倉素庵が刊行したと考えられる五種存する古活字版徒然草の中で、最初の刊行と思われる第一種本で、びつしりと唐草雲母刷文様のある料紙を全丁に使用する、嵯峨本らしい豪華さを有しており、平成二十八年に「開運!なんでも鑑定団」(テレビ東京)に出品されたものである。同じく素庵刊で、慶長八年以前刊と考えられる史記の国立公文書館蔵本の表紙裏から、この徒然草の刷り反故が発見されたことにより、刊行のおおよその下限が明らかとなった。上冊のみながら、美麗な料紙を有し、光悦謄本でも確認できる文様の表紙を備える、圓福寺蔵の嵯峨本徒然草を代表する本である。この第一種本は本書を含め十本が確認されている。前田善子、戸川浜雄、他旧蔵。



39

徒然草 兼好法師著 2巻

[元和寛永]刊 覆嵯峨本古活字第1種

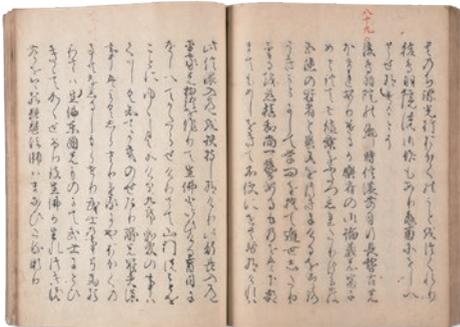
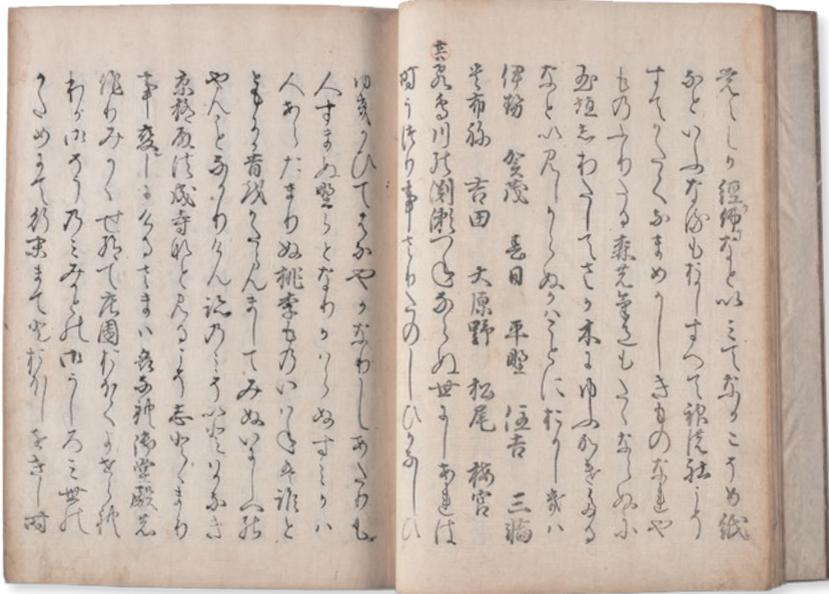
袋綴装2冊

縹色地石畳文空押表紙(28.0×19.7cm)。

左肩子持枠刷題簽「つれ(つれ)草」(上破損)。

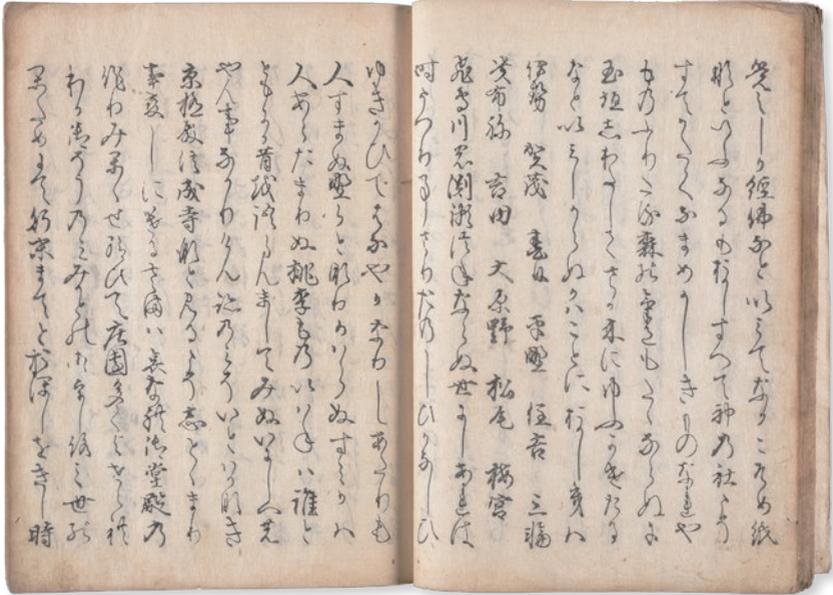
無辺無界(高21.5cm)10行17字基本。

嵯峨本の中でも伊勢物語と徒然草の人氣が特に高かったことは、両方共に活字で刷つたものを板に裏返して貼り付けて、新たに彫つた版木を用いた覆刻本が製作されていることから理解できる。これは第一種本を元にする版木で刷られた整版本であるが、古活字版にはなかつた句点や片仮名の振り仮名を彫り加えて啓蒙性を高めている。嵯峨本は贈答用として製作されたといわれることが多いものの、その覆刻本は初めから商品とするために刊行された可能性が高そうである。朱墨の他藍筆の書入れが行間や余白に目立つ。末尾に傍註は「諺解抄」(寛文九年(一六六九)刊の南部草寿『徒然草諺解』か)に拠るものであることを記した。寛政十二年(一八〇〇)二月の伝未詳の藤原直信の藍筆識語がある。



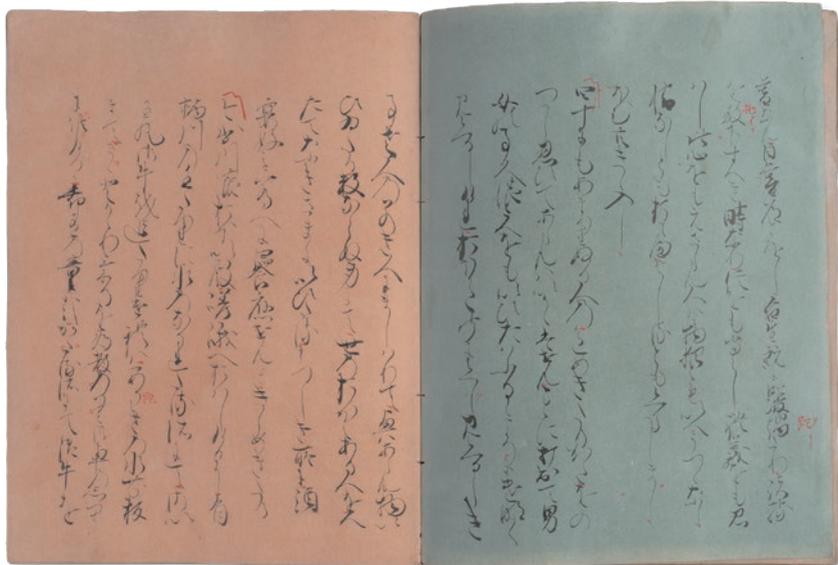
40
徒然草 兼好法師著 2巻
〔慶長〕刊 嵯峨本古活字上册第
3種・下册第4種 袋綴装2冊
後補薄茶色表紙(27.6×21.5cm)。
無辺無界(高22.1、下册21.7cm)
10行17字基本。

川瀬一馬は嵯峨本徒然草の雲母刷本を第一種と第二種に分類したが、高木浩明氏は巻首丁のみの違いであることを指摘し、第三種以下を繰り上げて整理する。混乱を生じかねないので、小秋元段氏の第二種を欠番とする方法を採用したい。この本が上下冊を取り合わせたものであることは、蔵書印の違いにも明らかで、下册にのみ紅梅文庫(前田善子)や戸川浜雄他の蔵書印がある。伊勢物語にも見られたように、欠けたもの同士を組み合わせて揃いにするのは珍しいことではない。嵯峨本の同一作品の雲母刷文様の有る本と無い本を並べて見比べられるのは、圓福寺蔵本ならではの贅沢であるが、両者の印象の違いには驚かされる。この本には朱筆書入れが目立つが、雲母模様のある第一種本では書入れを行うのは躊躇われるのではないだろうか。



41
 徒然草 兼好法師著 2巻
 [慶長]刊 嵯峨本古活字第4種取合
 袋綴装2冊
 転用丹色地菱米印唐草文艶出表紙
 (26.7×20.5cm)。後補左肩鳥の子地
 金小切箔散し題簽(文字無し)。
 無辺無界(高22.0cm)10行17字基本。
 一部片仮名振り仮名、朱句点書入れ。

古活字版、特に嵯峨本であればそれだけで貴重書と言えるものである。表紙が失われていたり、惨く傷んでいたりして、新たに表紙を加える場合には、全く新しい表紙にする場合もあれば、できるだけ本来の表紙に近いものにしよとすることもある。別の本の表紙を転用することも多く、この本も嵯峨本特有の紋様の表紙を付しているものの、雲母刷でなく艶出である上に、模様の向きが九〇度異なっていて違和感がある。上下冊は同種であるものの、上冊には飛騨松倉文庫、下冊には小汀文庫(小汀利得)の蔵書印があるので、後の取り合わせであることが判明する。本書に限らず嵯峨本に見える蔵書印は、やはり有名な蔵書家のものが目立つ。



42

徒然草 兼好法師著

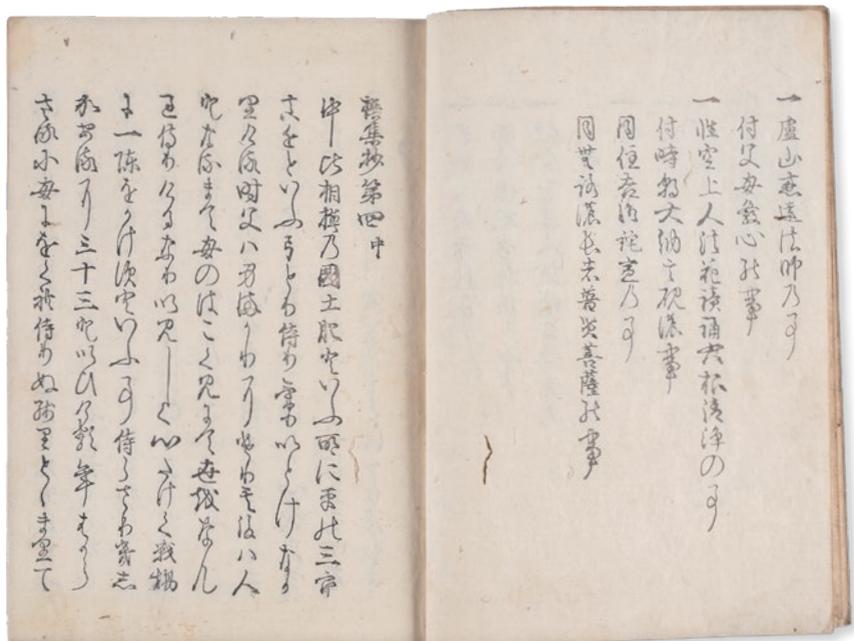
[江戸前期]写 伝大黒常信筆 綴葉装1帖

紺色地金泥梅笹文表紙(24.5×18.4cm)。

見返し水色地金銀小切箔銀砂子散し。

料紙五色具引紙。半葉9行(途中より11行)、
字高約19.2cm。朱の合点・句点・振り漢字・
異本注記・勘物などあり。古筆了信奥書極。

嵯峨本徒然草にはない綴葉装の写本。古い帙の題簽に「光悦津禮々々艸」とあるが、光悦流の特徴は少し薄く、嵯峨本よりもやや後の書写であろう。末尾に「本阿弥光悦門／大黒常信」筆と鑑定した古筆了信(一八七六一一九五三)の鑑定奥書がある。常信(？―一六七四)は、本朝古今名公古筆諸流の光悦流項に「大黒長左衛門 常信 光悦流 銀座江戸住」と見えており、署名のある短冊などからも光悦流の書き手であったことは疑いない。豪華な色替り料紙ながら、途中から行数が増えて文字も小さくなっている上に、全体に朱の書入れもあり、実用性を意識した写本であると思われる。光悦流の広がりを示す資料であろう。



43

撰集抄 3巻

〔慶長〕刊 嵯峨本古活字 袋綴装3冊

後補転用薄茶色地小石畳文空押表紙
(27.7×20.3cm)。

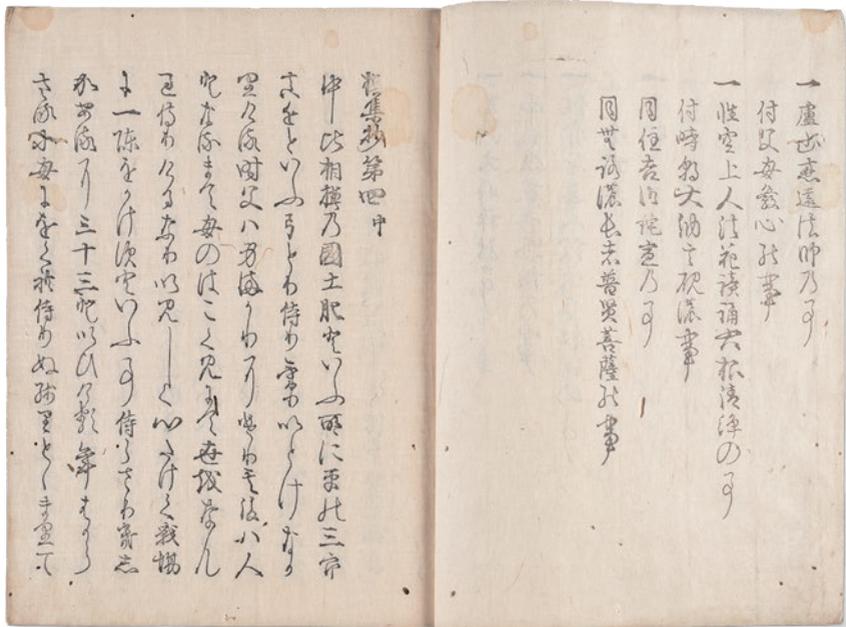
内題「撰集抄巻第一(～三・四中～六・
七下から九(二以降「巻」字ナシ))」。

上冊のみ内題下に「西行記」とあり。

料紙雲母刷具引料紙(下冊のみ薄茶色
紙を混用)。

無辺無界(高22.2cm)9行18字基本。

歌人西行が自分の見聞を記録したというスタイルをとる仏教説話集初の刊本。百二十一話の広本と五十八話の略本があり、嵯峨本は略本系である。昭和女子大学図書館蔵本に、元和八年(一六二二)に素庵の筆跡の刊本で、素庵から直接貰ったとの重要な識語があることが報告されている。川瀬一馬は嵯峨本伊勢物語第一種の活字の襲用を指摘し、料紙の違いで二種に分類するが、高木浩明氏は同一の版であることからその必要性を否定している。これは具引した上質紙のもので、版面の印象もやや異なるが、一番大きな違いは本の重さである。安田善次郎、フランク・ホーレー旧蔵。



44

撰集抄 3巻欠上

〔慶長〕刊 嵯峨本古活字 袋綴装2冊

後補薄茶色地鉄線花文空押表紙

(27.7×20.2cm)。

外題なし。内題「撰集抄巻第四中(～六・七下～九(二以降「巻」字ナシ))」。

無辺無界(高22.2cm)9行18字基本。

嵯峨本の撰集抄は高木浩明氏によって、先の三冊本を含めた十一本の存在が報告されているが、圓福寺には上冊を欠く二冊本も所蔵されている。これは通常の楮紙を使用したものであるが、この素紙摺は他に日光山輪王寺天海蔵本と日本大学総合学術センター所蔵本が知られるのみでやや珍しい。具引紙本と素紙本は同一の版であるので、最初から料紙の異なる二種を製作したことが理解できる。こちらは上冊を欠くものの、両種を所蔵するのは圓福寺のみである。平幡照政師は両者の違いを理解して求められたのであろう。

六、光悦謡本の不思議

他方乃湯衣を歌りしは珠櫛の
 凡の音ぞなれ乃志々魚と金く
 に心ひりるゝあゝもあまぎづち
 大活やな欠本能をちわて素考
 志きりつりみい道たわ 上 函儀
 歌依の歌ひな貴弱をたそへ

嵯峨

嵯峨本で最も出会う可能性が高いのが光悦謡本です。本阿弥光悦の関与が確認できないことから、現在では嵯峨本観世流謡本などと呼ばれることが増えていますが、あまりに定着した呼称で、この呼び方による研究の蓄積も大きいので、ここでも光悦謡本と呼ぶことをお許しただきたいと思えます。

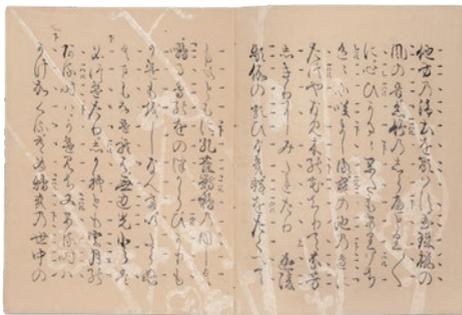
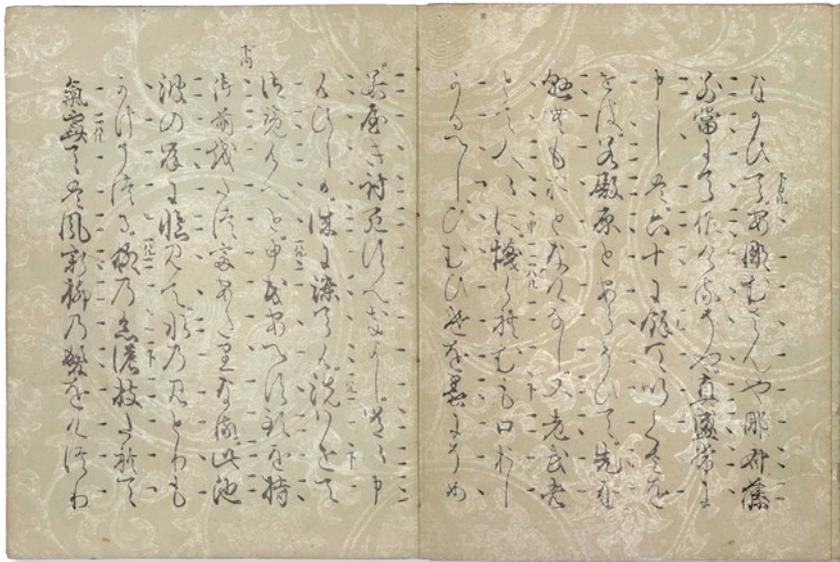
何故出会う可能性が高いのかといえば、先述のように製作と残存の点数が多いからに他なりません。能の作品は基本的に短いので、五曲を一冊に仕立てるなど、複数の曲を組み合わせたものも少なくありませんが、光悦謡本は少数の例外を除いてやはり一曲一冊となっています。また能は百曲ないし五十曲を一揃いとするものが多く、光悦謡本も、製作当時のものと考えられる箆笥や箱が百冊ぴったりのものであることから、やはり百番セットで製作されたものと考えられます。しかし不思議なことに、曲目数を数えると延べ百十七曲となることが報告されてもおり、近年精力的に光悦謡本を研究されている伊海孝氏は、曲の組み合わせは依頼者が選択できたのではないかと推測されています。全てがセットで製作されたわけでもないでしょうが、ともかくも曲数自体も多いのです。更に驚かされるのは、光悦謡本は種類が非常に多いという事実です。伊勢物語や徒然草を始めとして、嵯峨本は一作品に複数種あることは珍しくありませんが、光悦謡本は現在のところ十八種存在することが確認されています。比較的最近一種増えていますので、今後も増える可能性があります。

圓福寺には約二百冊もの光悦謡本があり、その内訳は基本的な四種とかなり珍しいもの一種からなります。光悦謡本の種類は装訂と装飾の様子で大きく分類されています。「特製本」と呼ばれるのが、綴葉装仕立てで、表紙と本文料紙共に雲母の模様を有する唐紙を使用した最も豪華なものです。料紙の色の種類は五色以上で、その内の一色で統一されています。唐紙の模様の種類は光悦謡本全体で二百種以上が確認されていますが、一冊の中で様々な模様を組み合わせて使用しています。「上製本」と呼ばれるのは、同じく綴葉装仕立てで、本文は一色に統一した具引紙で、表紙のみに唐紙を使用したものです。「上製色替本」と呼ばれるものは、本文に数色の具引紙を混用する点で異なるものです。「並製本」と呼ばれるのは、袋綴装のものです。表紙には唐紙を用いていますが、料紙には色はありません。綴葉装のものよりも珍しいようです。そして特に珍しいのが、同じく袋綴装でありながら、唐紙ではない一般的な縹色の表紙を有するものです。一番質素なものが一番珍しいのも、嵯峨本ならではの

といえそうです。唐紙の表紙を有する四種は、題名を印刷した題簽だいせんが左肩に貼り付けられているのに、これは中央にある点も異なっています。

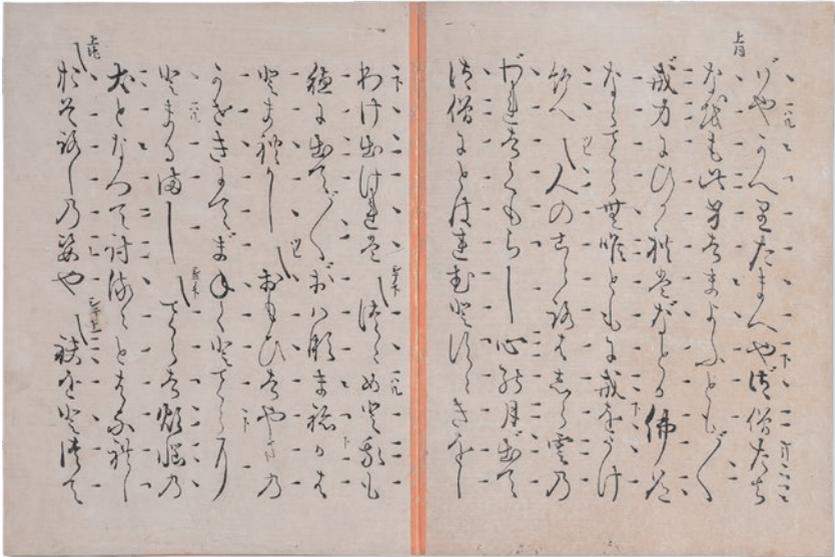
すべての光悦謡本で驚かされるのは、これほどの曲数の本文を活字で印刷するだけでも大変であるのに、謡本につきものの旋律を示す記号であるゴマ点まで活字で加えていることです。校正作業や修正作業まで考えると気が遠くなりそうです。そのような面倒なものをこれ程まで多種多数刊行した理由は何であつたのでしょうか。当時の能の流行による需要だけでは説明できそうにありません。はっきりした理由は不明ですが、今回出品されている素庵の観世流宗家の観世左近太夫黒雪宛こくせつの書状に、黒雪の仲介で素庵が謡本の書写を行つていたことが見えています。素庵の書家としての評価の高さを示すものとしても注目できますが、こうした謡本書写の経験がその刊行と関係しているのかもしれませんが。

それにしても、何故これほど多数の種類を刊行する必要があつたのか、伊海氏が本文の特徴まで詳しく検討されて、特製本・上製本・上製色替本で本文の性格に違いがあることを指摘されているのは示唆的です。また上製本は特製本に先立つとされてきましたが、完全に確定したことではありません。版種ごとに活字が異なるとされますが、まだまだ詳しく検討する必要はあるでしょう。光悦謡本は一番身近な嵯峨本ではあるものの、やはり大きな謎を秘めた存在なのです。



45
 [光悦謡本] 実盛・姥棄^{おぼすて}
 [慶長] 刊 嵯峨本古活字
 特製本 綴葉装 2帖
 具引地木版雲母刷文表紙
 (24.0×18.2cm)。
 左肩灰茶色刷題簽「さねも
 り」・「姥棄」。色具引地木
 版雲母刷種々文料紙。
 無辺無界(高18.9cm) 7行
 13字基本。

嵯峨本の中でも最も美しいと評される
 ことがあるのが光悦謡本である。嵯
 峨本の光悦関与が否定されていることも
 あり、最近では「観世流百番謡本」と呼ば
 れることが増えている。謡本とは能の
 練習用台本のことで、見た目から「こ
 ま点」などと呼ばれる節付けの譜が、
 詞章に傍記されているのが特徴であ
 る。細かく分類すると十八種もある光
 悦謡本の中で、表紙・料紙共に唐紙を
 使用した特別豪華な存在が、特製本と
 よばれる一群である。実盛は緑色地乱れ
 薄文の表紙で料紙は薄緑色、姥捨は白色
 地立薄文の表紙で料紙は薄茶色地であ
 る。緑色の顔料緑青は紙を劣化させる
 ので、保存に注意が必要である。料紙
 をめぐることにキラキラ光る文様が移
 り変わっていく様は圧巻である。



46

[光悦謄本] 通小町

[慶長] 刊 嵯峨本古活字

上製本 綴葉装1帖

洗朱色具引地木版雲母刷桐花文表紙

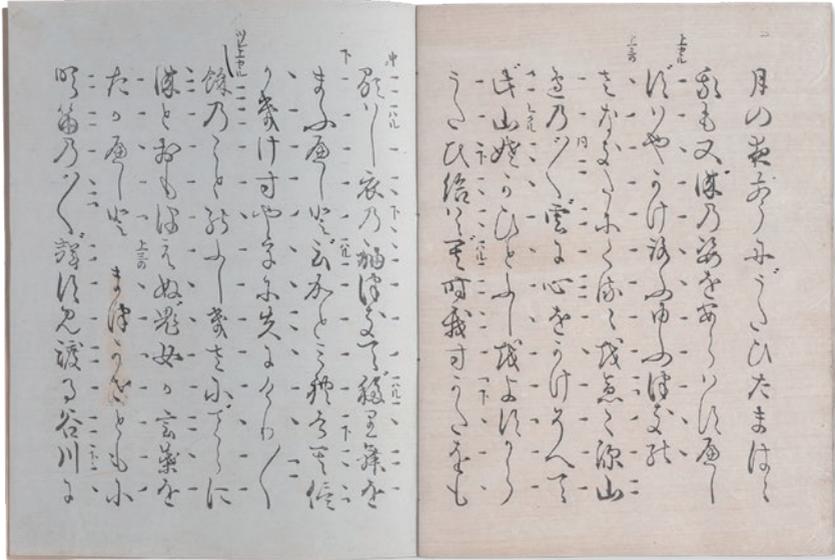
(23.8×17.9cm)。左肩灰茶色刷題簽「通小町」。

白具引紙料紙。

無辺無界(高19.0cm)7行13字基本。



表紙は唐紙で、料紙は様々な色の具引紙を一色だけ用いるのが上製本である。活字は特製本とは異なるセットを使用しているといわれ、題簽の版木も異なっている。本の大きさも特製本より微妙に小さいのが特徴である。特製本が上製本に先立つと考えられていたが、表章は表紙の模様の有様などから、上製本が先との説を提示した。他の作品の嵯峨本では、最も豪華なものが最初に刊行される傾向があり、総合的な検討により光悦謄本の各種の刊行順を確定することが望まれる。料紙の雲母刷文の有無で印象がかなり異なるのは徒然草と同様である。圓福寺には百番がほぼ揃った上製本が所蔵されているが、この本は斯道文庫蔵本である。



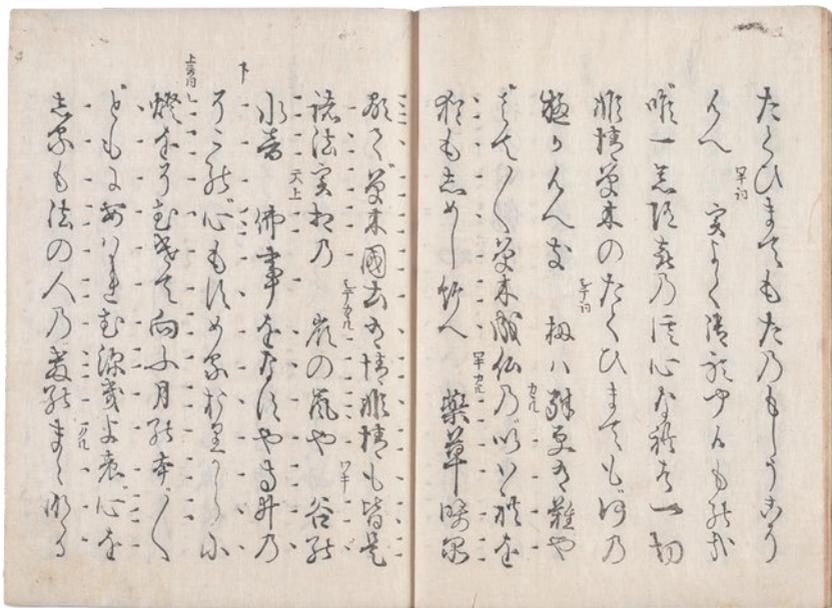
47

[光悦語本] 山うは
 [慶長]刊 嵯峨本古活字
 上製色替本 綴葉装1帖

薄桃色具引地木版雲母刷四本細竹文表紙
 (23.8×17.9cm)。左肩灰茶色刷題簽「山うは」。
 数色具引紙料紙混用。
 無辺無界(高19.0cm)7行13字基本。

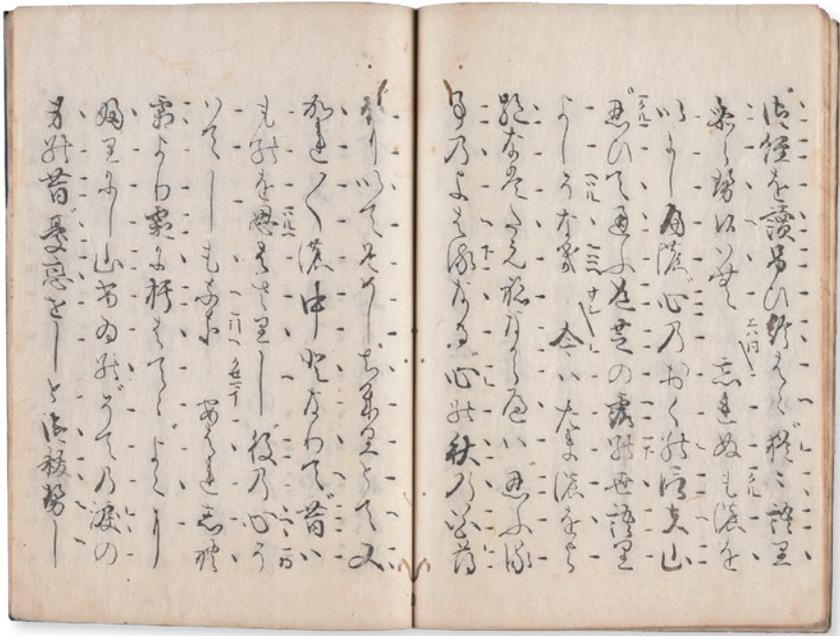


表紙は唐紙で、料紙は数色の具引紙を混用するのが上製色替本である。上製本とは別版であるが、大きさが共通することに象徴されるように題簽も同版で、活字も共通するものもあることから、上製を冠して呼ばれている。この山姥には、もと二文字の連続活字二つで「かせまつ」と刷られていた部分を、胡粉ごと摺り消して、順序を変えて上から「まつかせ」と活字でスタンプして訂した箇所が確認できる。色の異なる紙を混用するのは、袋綴装の伊勢物語と伊勢物語聞書や、同じく綴葉装の百人一首など、嵯峨本を代表する装飾方法の一つであるといえる。圓福寺には複数の上製色替本も所蔵されているが、この本は斯道文庫蔵本である。



48
 [光悦謠本] あこき・あま・
 自然居士・はせを・三輪
 [慶長]刊 嵯峨本古活字
 並製本 袋綴装5冊
 色具引地木版雲母刷文表紙
 (24.1×18.1cm)。
 左肩灰茶色刷題簽。
 無辺無界(高19.3cm)、
 7行13字基本。

光悦謠本の基本的な種類の中で綴葉装の三種よりも珍しいのがこの袋綴装の並製本であり、圓福寺には六冊欠けた百番本が所蔵されている。各冊末尾に「後 但馬守(花押)」との旧蔵者の署名がある。阿漕(くもなし)は梔子色具引地(葡萄)文、海士は白茶色具引地親子鶴、自然居士は緑色具引地高松文、芭蕉は銀鼠色具引地(立葵)、三輪は梔子色具引地蛇籠に波文の唐紙表紙である。やはり緑色の自然居士の表紙は状態が悪い。嵯峨本で綴葉装の方丈記と百人一首にも袋綴装のものがあるが、それらも袋綴装のものの方が珍しい点で共通する。



49

〔光悦謡本〕〔鞍馬天狗〕・源氏供養・定家・天鼓・道成寺

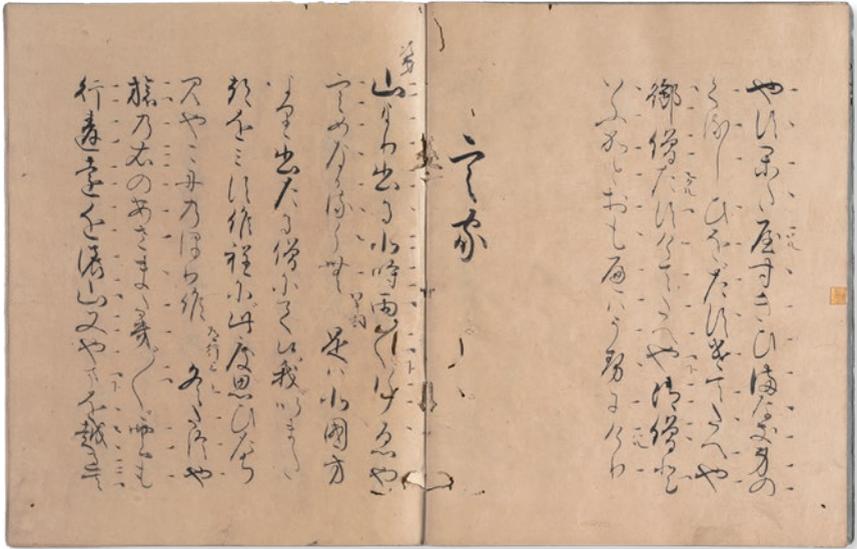
〔慶長〕刊 嵯峨本古活字 並製別本袋綴装5冊

縹色表紙(24.5×18.2cm)。

中央灰茶色題簽(鞍馬天狗欠)。

無辺無界(高19.3cm)、7行13字基本。

光悦謡本の並製本よりも猶珍しいものが、通常の版本では珍しくない縹色の表紙のもので、圓福寺には五冊が所蔵されている。冒頭に「預小納戸」の朱印があり、大名家の旧蔵本であったかと思われる。表紙や題簽が並製本よりも少しだけ大きいだけでなく、題簽の位置が光悦謡本の基本の四種と異なり、唯一表紙の中央にあるのが大きな特徴である。豊臣時代には秀吉が金春安照をお抱え役者とし、金春流が隆盛していたが、徳川時代になると、幼少期から家康に仕えていた観世身愛(黒雪)が重んじられるようになり、江戸時代に観世流が発展することとなった。幕府の初期に、光悦謡本のような手間のかかる活字本が、当時としては大量に刊行された事実は、観世流の勢いを象徴するようである。



50

善知鳥・定家

〔江戸初期〕写 伝本阿弥光悦筆
綴葉装1帖花浅葱色地雷文繫唐花唐草文蠟
箋表紙(23.5×18.4cm)。左肩の緑色地金泥〔葦〕文題簽に
「善知鳥／定家」と墨書(本文同
筆カ)。「善知鳥」は内題なく、そ
の末尾余白に「定家」と書き入れ。
料紙鳥の子。半葉7行、字高約
18.5cm(本文のみ)。節付あり。

光悦謄本とほぼ同じ大きさの綴葉装の写本で、光悦流の筆跡で善知鳥と定家を合写している。両曲を光悦謄本の特製本・上製本と比較してみると、節付はもとより、本文の改行箇所まで一致し、漢字仮名の当て方は上製本と高い共通性を有するらしいことが確認できる。写本と光悦謄本の先後関係は俄に判断しがたいが、このような写本を見ると、光悦謄本の版面が極めて写本に近い仕上がりになっていることが良く理解できる。剥がれた裏返し裏面に、明治三十四年三月付の山城国八幡圓福寺住持・見性宗般(一八四八—一九二二)の光悦筆との伝承があると伝える、天地が逆になった識語がある。

嵯峨

「嵯峨本」かどうかの境界線上にある代表的な存在が、古活字版の源氏物語です。この本は題簽を含めた表紙に唐紙が使用されていること、書風が光悦風であることから、嵯峨本とする意見もあつたものの、他の嵯峨本と比較してその特性が薄いことから、影響を受けたものとする見解が一般的になっていきます。文字の小ささや行間の狭さなどの特徴が否定材料とされたりもしますが、源氏物語が長編であることによるものである可能性もあり、決定的な決め手にはならないとする意見もあります。嵯峨本に含められている、源氏物語の梗概書こうがいである源氏小鏡三冊と比較しての差異も気になるところで、やはり今後の更なる研究が俟たれます。

圓福寺には、洗い朱色の表紙のセツトの内の三冊が所蔵されています。蔵書印の一致から一具のものであることは確かです。他の嵯峨本に比して、文字が小さいといつても、光悦・素庵風の大きな活字も混用されており、独特の雰囲気醸し出しています。

嵯峨本によく似た写本の存在は、嵯峨本がそのような写本に近づけることを意図して製作されたことを教えてくれるようですが、嵯峨本の影響を受けた写本もあるはずで、その識別はなかなか難しいところです。今回出品したものは、綴葉装であることに加えて、緞子表紙を有するという、嵯峨本ではない特徴も有する源氏物語の篝火ですが、唐紙の題簽であること、料紙に具引きを施していること、そして光悦風の書風であることなど、嵯峨本との共通点も多く指摘できる写本です。

源氏物語の本文は大きく三つに区分するのが定説となっています。一つは伝嵯峨本他の江戸時代版本で使われた「定家本」で、「青表紙本」と呼ばれてきましたが、近年は藤原定家由来の本であることをはっきりさせるためなどでこう呼ばれることが多くなっています。もう一つは、藤原定家とも親交のあつた源光行・親行父子が二十以上の写本を利用して作成した校訂本文である「河内本かわちほん」です。そしてこの二系統に属さない、グループが難しい本文を有するものをまとめて「別本」と呼んでいます。

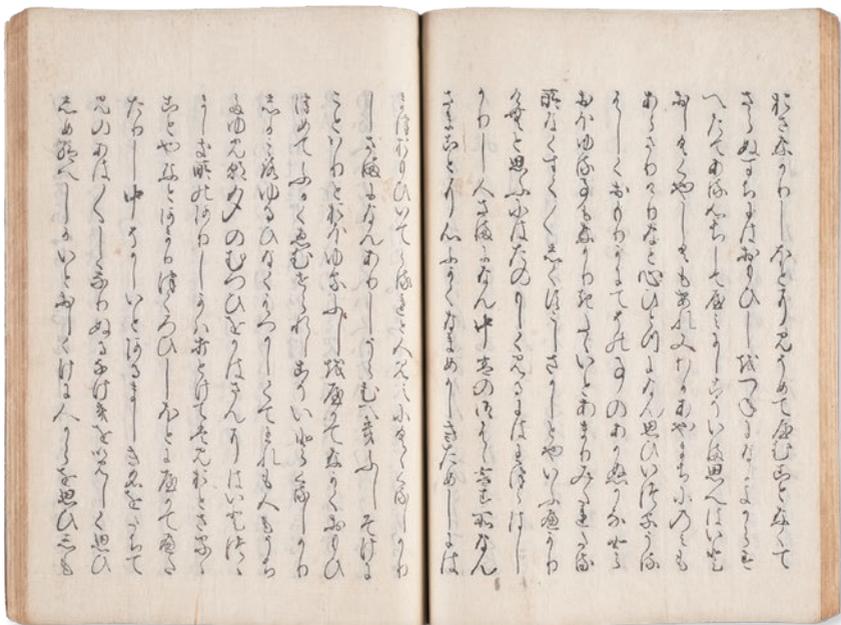
嵯峨本とは離れてしまうのですが、圓福寺には別本と河内本の注目すべき古写本が存在しています。学術的にも非常に価値の高いものなので、今回特別に出品いただきました。一点は伝西行筆の幻で、中世期の物語作品に多い柀形の綴葉装です。江戸時代に西行と鑑定されるだけあって、源氏物語でも指折りの古さを有しており、使

用する仮名に平安時代の名残を強く示すことから、西行と同時代のものと考えてよいと思われます。定家や光行以前のものなので、古い本文を伝える別本であるばかりではなく、製作当時のものと思われる表紙が残存している点も非常に貴重です。この表紙が一致することから、天理大学天理図書館蔵の伝源頼政筆の柏木がもと一具のものと同判明しています。

もう一点は、伝二条為氏筆の夕霧です。こちらは源氏物語の古写本としては珍しい縦型の綴葉装写本です。この大きさの鎌倉時代写本は河内本である確率が高いのですが、この夕霧もやはり河内本でした。慶應義塾図書館に、大きさと仕立てが良く似た、書写時期も近いと考えられる河内本の伝九条良経筆の末摘花が所蔵されているので、比較のために並べてみました。

源氏物語は人気のあった作品だけあって、写本版本共に非常に多くのものが伝わっています。四点のみではありませんが、個性の際立ったものばかりですので、比較する楽しみを味わっていただけますと幸いです。

また慶應義塾（センチュリー赤尾コレクション）の中から、源氏物語に因む絵画の優品二点も出品しています。どちらも嵯峨本と同時代の作品で、嵯峨本が豪華であることに時代の風潮が関係していることを感じることができるとは思いません。



51

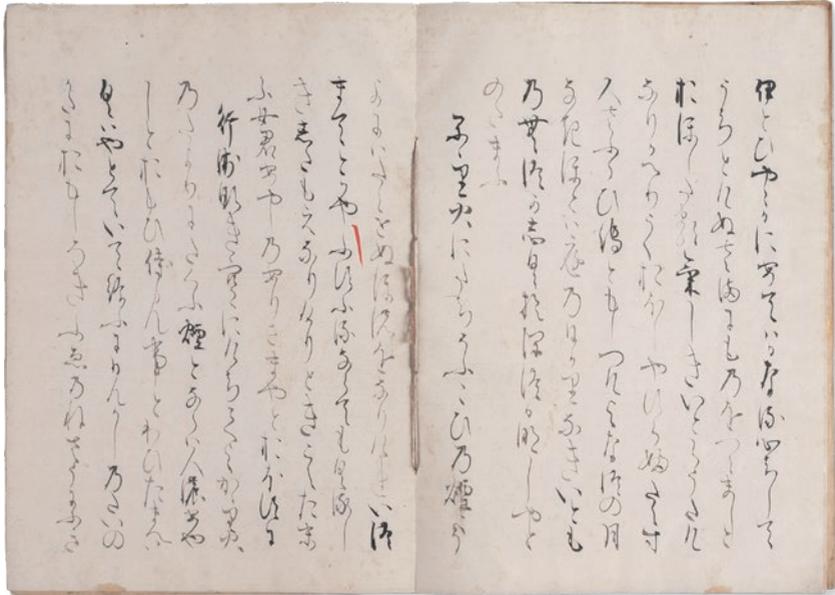
源氏物語 床夏・若菜上下

〔慶長元和〕刊 古活字 袋綴装3冊

洗朱色表紙(28.7×21.4cm)。

中央白地唐紙刷題簽に「床夏」・
「若菜上(下)」とあり。無辺無界
(高22.1cm)11行22字基本。

源氏物語にも四種以上の古活字版が確認されている。これは二番目と考えられるもので、嵯峨本で多用される唐紙の題簽を用い、書体も光悦風であることから嵯峨本に加えられてきた。文字が小さく行間も狭いことなどから、現在では否定されているが、長編作品であることに関連する例外的な存在とみる意見もある。版本の源氏物語は基本的に定家本(青表紙本)であるが、この「床夏」の他、「花散里」と「野分」が河内本、「宿木」は別本に属すと指摘されている。題簽の表記に「散眼木」(さかき)・「赤石」(あかし)・「水衝石」(みをつくし)など、独特な表記を用いているのが特徴で、東京大学図書館蔵の写本などとも共通している。表紙の色が水色の伝本もある。臨野堂文庫・飯山宮他旧蔵。



52

源氏物語 篝火

〔江戸初期〕写 綴葉装1帖

珊瑚朱色地唐華楓文緞子表紙(25.7×18.3cm)。中央の白色地花筏文唐紙題簽に「かゝり火」と墨書(本文同筆カ)。見返し金小切箔散し。白具引紙料紙。字面高さ約20.8cm、半葉9行。注の存する箇所を示す朱合点あり。



嵯峨本の綴葉装の源氏物語が刊行されたならば、このような雰囲気かと思わせる、料紙と筆跡の写本である。緞子表紙を有することからも、版本を意識したものではないが、同時期の通常の嫁入り本のような、読みやすい文字の写本群とは一線を劃している。江戸初期頃に光悦流の書体を有する写本も存在していたという事実は、やはり嵯峨本がそのような写本に似せて作られた可能性を示すものとして注意して良いように思われる。篝火帖しか確認できないが、題簽の文字も光悦風であることからしても、全帖似た雰囲気であった可能性が高そうである。本文は江戸時代に流布した定家本系である。未詳の伊藤家旧蔵。



53

源氏物語橋姫図

江戸初期 伝俵屋宗達筆
紙本着色

『源氏物語』五十四帖のうち第四十五帖「橋姫」を描いた作品。宇治八宮邸を訪れた薫が、大君と中君の姉妹が琴と琵琶を合奏する姿を偶然垣間見る場面である。琵琶の撥を手にする人物は中君と見られ、簀子の上に控えるのは近侍の女房であろう。大君を省略する図様は、江戸初期の作例としては珍しいとの指摘がある（『宗達―物語の風景―源氏・伊勢・西行』展図録、和泉市久保惣記念美術館、二〇一三年）。有明の月が雲間から現れ、月明かりが姫君を照らし出す情景が広がる。中君と侍従の視線の先に浮かぶ銀泥の丸く大きな月は、幻想的な情景を効果的に演出している。また本図は大正から昭和期にかけて活躍した実業家・団琢磨（一八五八―一九三二）の旧蔵で、古写真からかつて六曲一双屏風左隻第四扇上段の第一図に位



置していたことが判明している。現在は屏風が裁断され、諸家に分蔵されている。なお、屏風の右隻右下に相当する「空蟬図」、左隻左下の「浮舟図・夢浮橋図」には、宗達主宰の工房作に用いられる「伊年」印を有する。

54
朧月夜内侍図

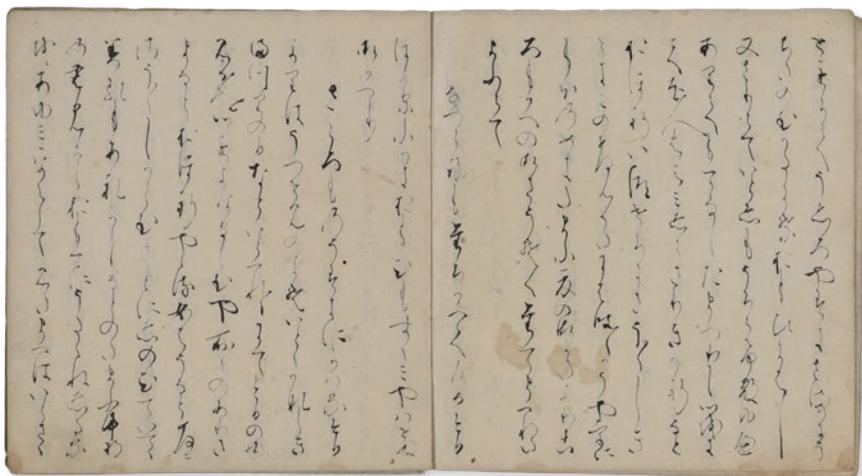
江戸初期 伝岩佐又兵衛筆
紙本着色



『源氏物語』五十四帖のうち第八帖にあたる花の宴はなえん、すなわち桜の宴において光源氏と朧月夜が邂逅し、密かな逢瀬を交わす場面を描いた作品。本図では、光源氏が朧月夜の背に腕を回し、奥へと誘わんとする、ドラマチックな瞬間が絵画化されている。本図は、かつて存在した旧金谷屏風から軸装となった、現在所在

不明の「源氏物語花の宴図」の模写と考えられる。本図は旧金谷屏風本と人物の輪郭線などが完全一致せず、また画面四隅がわずかに切り詰められるなど、いくつかの相違点が認められる。また、押捺されている印章の種類と位置にも違いがあり、旧金谷屏風本では画面左下に「碧勝宮図」白文方印が押されるのに

対し、本図では右下に「勝以かつもち」朱文二重円印が確認できる。この印章は、「布袋図」（東京国立博物館蔵）や「月見西行図」（群馬県立近代美術館戸方庵井上コレクション蔵）のそれと近似している。以上の相違点から、本図が又兵衛本人の手によるものかについては検討を要するだろう。



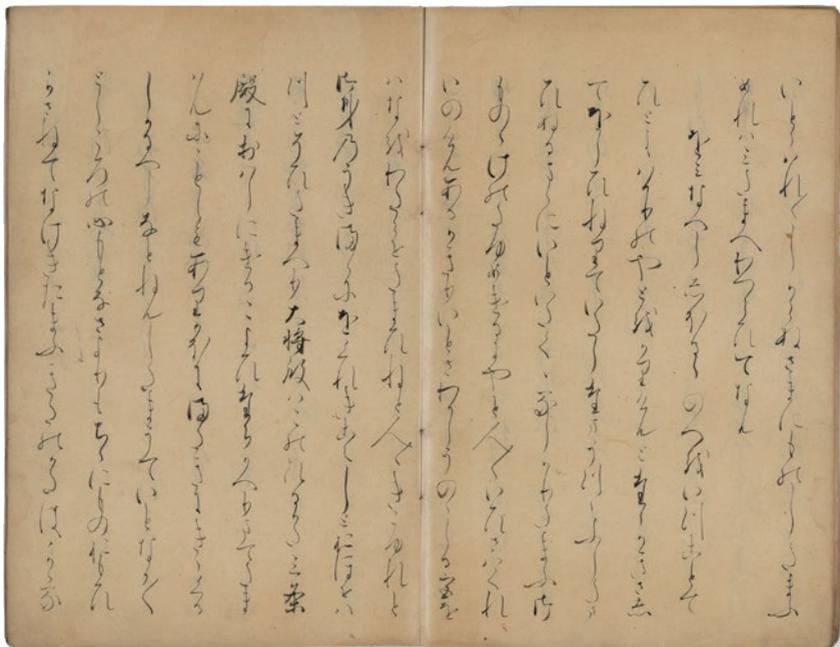
55

源氏物語 幻

〔鎌倉初期〕写 伝西行筆 柵形綴葉装1帖

墨流地に金銀切箔砂子で雲霞を金銀泥と緑青で牡丹文を描いた表紙(16.3×15.2cm)。外題は中央に「廿五〔ま〕ほろし」と本文異筆で打付け書き。料紙は雲母引き楮打紙。字高約15.0cm、半葉12行。裏見返しに古筆了意のものと思われる鑑定書貼付。

源氏物語写本の最古級の伝本で、定家本・河内本成立以前の書写なので本部は別本である。東京国立博物館蔵の保坂本の同巻と近い本文であることが指摘されている。鎌倉期の物語写本では普通の柵形の六半本であるが、表紙・料紙・筆跡ともに上質で、高貴な人物の所持本と推測される。表紙模様の一致より天理図書館蔵の伝源頼政筆「柏木」と僚²⁾巻であると判明する。鎌倉時代には使用されなくなる古い仮名が多用されており、平安時代の本文を検討する上で重要な伝本である。『斯道文庫論集』53に影印と翻刻・解題がある。



56

源氏物語 夕霧

〔鎌倉中期〕写 伝二条為氏筆
綴葉装1帖

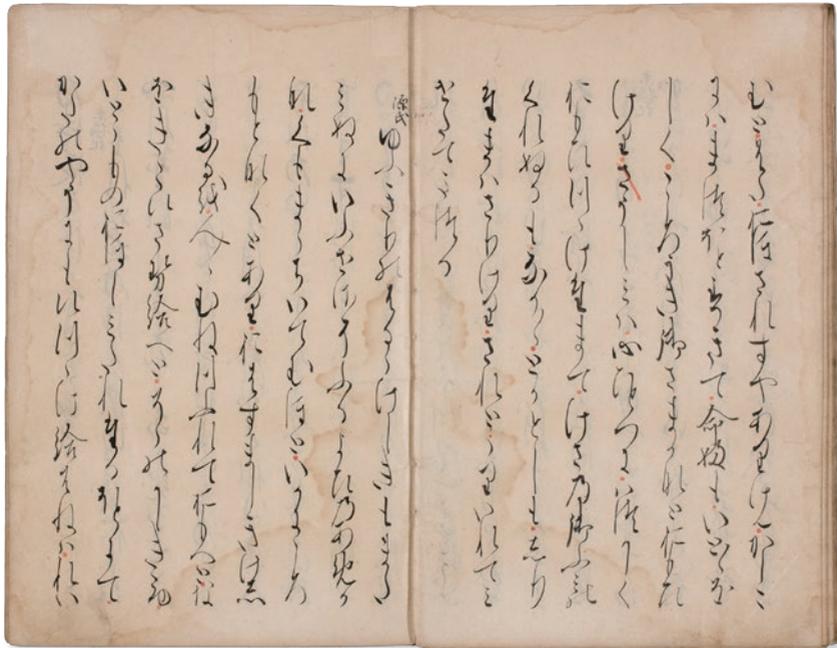
後補藍色地靈芝唐草文緞子表紙
(22.8×14.8cm)。

後補金泥下絵金小切箔散し題簽に
「夕霧」と墨書。料紙鳥の子。

字高約19.1cm、半葉8行。

明暦3年畠山牛庵折紙を付す。

鎌倉・南北朝期の物語写本が樹形の六半本を基本とする中で、長方形の四半本も少ないながら存在している。その中でも、藤原忠通を祖とする法性寺流、およびそこから派生した九条良経を祖とする後京極流と、その息教家を祖とする弘誓院流などの、鎌倉時代の武家社会で流行した端正な筆跡で書写されたものは、源光行・親行父子による校訂本である河内本であるだけでなく、素性の良い本文を有する可能性が高い。江戸時代に二条為氏筆と鑑定された本書は、もとより為氏筆ではないが、良質の料紙に能筆によって書写されており、やはり河内本の善本であると認められる。河内本の古写本の多くに認められる朱の句点が存在しないのが、理由は不明ながら大きな特徴である。



57

源氏物語 末摘花

〔鎌倉中期〕写 伝九条良経筆 綴葉装1帖

後補白茶色地作土霊芝花兎文金欄表紙
(24.4×15.8cm)。外題なし。

見返し後補鶯色地金小切箔散し。扉として薄
茶色地金砂子野毛散しの元表紙を使用。扉左
肩に打付けで「すゑつむはな第三のならび」と墨
書(本文異筆、伝二条為忠筆)。料紙鳥の子。
字高約20.1cm、半葉8行。朱句点・合点。

近代の校合書入れあり。

長方形の四半の良質紙に、後京極流の能書が書写しており、やはり河内本の清書的な写本であると認められる。河内本成立時には良経は没しているが、その没後も鎌倉周辺で後京極流が流行していたことは、今日河内本の代表的写本として使用される、寄合書きの大型写本である「尾州家本」中に、多く確認できることに明らかである。扉として、本文の書写時期よりもやや遅れると思われる元表紙が残存していることも貴重で、物語の外題は表紙中央という当時の故実と異なり、歌書と同じ左肩に有しているのも興味深い。

	法量(縦×横(cm))	制作年	所蔵	作品管理番号等
	216.0×112.7(描表装含む)	江戸	飯沼観音圓福寺	
	92.5×49.7	鎌倉	飯沼観音圓福寺	
	36.4×736.5	明暦2年(1656)	飯沼観音圓福寺	
	30.8×21.6	[慶長8年(1603)以前]刊	斯道文庫	091・ト260・12-1
	29.7×21.0	[慶長8年(1603)以前]刊	斯道文庫	091・ト327・1
	25.8×19.5	[15～6世紀]朝鮮刊	斯道文庫	091・ト194・1
	28.0×20.7	[慶長9年(1604)頃]	斯道文庫	092・ト38・12
	27.8×20.9	[慶長]刊	個人蔵	
	27.0×19.3	慶長13年(1608)刊	飯沼観音圓福寺	
	25.3×17.7	[室町中後期]写	個人蔵	
	36.7×51.6	[慶長4年(1599)]刊	慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)	AW-CEN-001778-0000
	27.0×19.5	慶長13年(1608)刊	飯沼観音圓福寺	
	26.8×19.2	[慶長13年(1608)]刊	飯沼観音圓福寺	
	26.8×19.2	[慶長13年(1608)]刊	飯沼観音圓福寺	
	26.8×19.1	[慶長13年(1608)]刊	飯沼観音圓福寺	
	27.7×19.3	[慶長元和頃]刊	飯沼観音圓福寺	
	27.0×19.3	[慶長13年(1608)]刊	飯沼観音圓福寺	
	27.0×19.3	慶長13年(1608)刊	飯沼観音圓福寺	
	26.5×19.5	[元和寛永頃]刊	飯沼観音圓福寺	
	27.0×19.3	[元和寛永頃]刊	飯沼観音圓福寺	
	26.9×19.3	慶長14年(1609)刊	飯沼観音圓福寺	
	27.3×19.3	[慶長15年(1610)]刊	飯沼観音圓福寺	
	27.1×19.4	慶長15年(1610)刊	飯沼観音圓福寺	
	26.5×18.3	慶長15年(1610)刊	飯沼観音圓福寺	
	24.8×18.8	慶長14年(1609)刊	飯沼観音圓福寺	
	31.3×41.7	[江戸初期]	慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)	AW-CEN-001762-0000
	29.7×43.2	[江戸初期]	慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)	AW-CEN-000851-0000
	27.8×268.3	[江戸初期]写	飯沼観音圓福寺	
	24.8×223.0	[江戸初期]写	慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)	AW-CEN-001309-0000
	33.7×44.2	[江戸初期]写	慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)	AW-CEN-000582-0000
	33.8×40.4	[江戸初期]写	慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)	AW-CEN-002357-0000
	19.9×17.4	[江戸初期]写	慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)	AW-CEN-002207-0000
	24.0×35.6	[江戸初期]写	個人蔵	
	36.2×5.7	[江戸初期]写	個人蔵	
	11.0×15.6	[江戸中期]刊	個人蔵	
	26.4×18.6	[慶長15年(1610)以前]刊	飯沼観音圓福寺	
	26.7×20.5	[慶長]刊	飯沼観音圓福寺	
	28.0×21.0	[慶長8年(1603)以前]刊	飯沼観音圓福寺	
	28.0×19.7	[元和寛永]刊	飯沼観音圓福寺	
	27.6×21.5	[慶長]刊	飯沼観音圓福寺	
	26.7×20.5	[慶長]刊	飯沼観音圓福寺	
	24.5×18.4	[江戸前期]写	個人蔵	
	27.7×20.3	[慶長]刊	飯沼観音圓福寺	
	27.7×20.2	[慶長]刊	飯沼観音圓福寺	
	24.0×18.2	[慶長]刊	飯沼観音圓福寺	
	23.8×17.9	[慶長]刊	斯道文庫	091・ト428・1
	23.8×17.9	[慶長]刊	斯道文庫	091・ト429・1
	24.1×18.1	[慶長]刊	飯沼観音圓福寺	
	24.5×18.2	[慶長]刊	飯沼観音圓福寺	
	23.5×18.4	[江戸初期]写	個人蔵	
	28.7×21.4	[慶長元和]刊	飯沼観音圓福寺	
	25.7×18.3	[江戸初期]写	個人蔵	
	27.5×62.8	江戸初期	慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)	AW-CEN-000208-0000
	119.2×53.0	江戸初期	慶應義塾(センチュリー赤尾コレクション)	AW-CEN-002037-0000
	16.3×15.2	[鎌倉初期]写	飯沼観音圓福寺	
	22.8×14.8	[鎌倉中期]写	飯沼観音圓福寺	
	24.4×15.8	[鎌倉中期]写	慶應義塾図書館	132X@191@1

作品no.	作品名	装訂・巻数・頁数	筆者・刊行者・版種等
1	五大尊像	軸装1幅	
2	不動明王二童子像	軸装1幅	
3	飯沼山親世音縁起絵巻	卷子装1軸	狩野友仁正成筆
4	史記 序目録	袋綴装1冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字
5	史記 卷31、32	袋綴装1冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字
6	三略直解	袋綴装1冊	朝鮮銅活字
7	平家物語	袋綴装12冊(内 巻1・2・12の3冊)	下村時房刊 古活字
8	平治物語	袋綴装3巻存巻中1冊	[紀州能阿弥]刊 古活字
9	伊勢物語	袋綴装2巻2冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字第1種
10	伊勢物語	綴葉装1帖	伝平田墨梅筆
11	詩歌懷紙	軸装1幅	中院通勝筆
12	伊勢物語	袋綴装2巻2冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字第1種
13	伊勢物語	袋綴装2巻存上1冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字第1種
14	伊勢物語	袋綴装2巻存下1冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字第2種乙
15	伊勢物語	袋綴装2巻存上1冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字第2種乙
16	伊勢物語	袋綴装2巻存上1冊	模嵯峨本古活字第2種甲古活字
17	伊勢物語	袋綴装2巻存上1冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字第1種
18	伊勢物語	袋綴装2巻存下1冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字第2種甲
19	伊勢物語	袋綴装2巻存下1冊	覆嵯峨本古活字第2種甲
20	伊勢物語	袋綴装2巻2冊	覆嵯峨本古活字第2種甲
21	伊勢物語	袋綴装2巻存下1冊	嵯峨本古活字第3種
22	伊勢物語	袋綴装2巻2冊	嵯峨本古活字第4種甲
23	伊勢物語	袋綴装2巻存下1冊	嵯峨本古活字第4種甲
24	伊勢物語	袋綴装2巻2冊	嵯峨本古活字第4種乙
25	伊勢物語聞書(肖聞抄)	袋綴装3巻2冊	宗祇講牡丹花肖柏録 嵯峨本古活字 無捺印本
26	[川辺新四郎]宛書状	軸装1幅	角倉素庵筆
27	觀世黒雪宛書状	軸装1幅	角倉素庵筆
28	[古歌巻]	卷子装1軸	伝本阿弥光悦筆
29	[古歌巻]	卷子装1軸	伝角倉素庵筆
30	木版下絵和歌巻断簡	軸装1幅	伝本阿弥光悦筆
31	木版竹下絵和歌巻断簡	軸装1幅	伝本阿弥光悦筆
32	古歌色紙	軸装1幅	伝本阿弥光悦筆
33	百人一首断簡	1紙	伝本阿弥光悦筆
34	古歌短冊	1枚	伝角倉素庵筆
35	本朝古今名公古筆諸流(萬宝全書5の内)	袋綴装横本1冊	
36	方丈記	綴葉装1帖	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字第1種
37	徒然草	袋綴装2巻存上1冊	慶長中刊10行本 古活字
38	徒然草	袋綴装2巻存上1冊	嵯峨本古活字第1種
39	徒然草	袋綴装2巻2冊	覆嵯峨本古活字第1種
40	徒然草	袋綴装2巻2冊	嵯峨本古活字上册第3種・下册第4種
41	徒然草	袋綴装2巻2冊	嵯峨本古活字第4種取合
42	徒然草	綴葉装1帖	伝大黒常信筆
43	撰集抄	袋綴装3巻3冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字
44	撰集抄	袋綴装3巻欠上2冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字
45	[光悦謄本]実盛・姥養	綴葉装2帖	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字 特製本
46	[光悦謄本]通小町	綴葉装1帖	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字 上製本
47	[光悦謄本]山うは	綴葉装1帖	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字 上製色替本
48	[光悦謄本] あこき・あま・自然居士・はせを・三輪	袋綴装5冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字 並製本
49	[光悦謄本] [鞍馬天狗]・源氏供養・定家・天鼓・道成寺	袋綴装5冊	[角倉素庵]刊 嵯峨本古活字 並製別本
50	善知鳥・定家	綴葉装1帖	伝本阿弥光悦筆
51	源氏物語 床夏・若業上下	袋綴装54巻存3冊	古活字
52	源氏物語 篝火	綴葉装1帖	伝二条為氏筆
53	源氏物語 橘姫図	軸装1幅	伝伏屋宗達筆
54	朧月夜内侍図	軸装1幅	伝岩佐又兵衛筆
55	源氏物語 幻	枳形綴葉装1帖	伝西行筆
56	源氏物語 夕霧	綴葉装1帖	伝二条為氏筆
57	源氏物語 末摘花	綴葉装1帖	伝九条良経筆

もつと嵯峨本を知りたい人のための参考文献リスト

(高須賀萌編・佐々木孝浩監修)

もつと嵯峨本を知りたい人のために、以下の基準で参考文献を選定しました。
 ・嵯峨本に関する主要な先行研究(書籍・論文)
 ・嵯峨本を主とした作品を収録した主要な展覧会図録
 参考文献は資料種別ごとに分類し、研究の流れがわかるよう発行年の古い順に並べています。
 本展をきっかけに、嵯峨本の魅力をさらに深く探っていただければ幸いです。

【書籍・論文集】

- ・和田維四郎『嵯峨本考』(和田維四郎、一九一六年)
- 「朝倉治彦・林望監修、和田維四郎『嵯峨本考』(復刻版、名著普及会、一九九二年)
- 「和田維四郎『嵯峨本考』(近世文芸研究叢書刊行会編『近世文芸研究叢書』第一期文学篇9、クレス出版、一九九五年)
- 川瀬一馬『嵯峨本圖考』(一誠堂、一九三二年)
- 樋口功『嵯峨本活字本源氏物語について』(湯川松次郎、一九三四年)
- 川瀬一馬『古活字版の研究』(安田文庫、一九三七年)
- 高安六郎『光悦の謡本』(繪書店、一九五七年)
- 表章『鴻山文庫本の研究 謡本の部』(わんや書店、一九六五年)
- 川瀬一馬『増補古活字版の研究 上中下』(日本古書籍商協会、一九六七年)
- 江島伊兵衛・表章編集・解説『図説光悦謡本』(有秀堂、一九七〇年)
- 川瀬一馬『日本書誌学之研究 続』(雄松堂書店、一九八〇年)
- 川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』(雄松堂書店、一九八二年)
- 『日本古典文学会編『東洋文庫蔵光悦謡本解題』複製日本古典文学館、ほるぶ出版、一九八三年)
- 『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、一九九九年)
- ・近畿大学日本文化研究所『日本文化の諸相 その継承と創造』(風媒社、二

〇〇六年)

角倉素庵の書跡と嵯峨本 素庵書『詩歌卷』と嵯峨本『新古今和歌集抄月詠歌卷』(林進)

嵯峨本『伊勢物語』慶長十三年刊の諸版における連彫活字について 三
 倍格の活字駒を中心として(森上修)

私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会書誌学研究会『嵯峨本「伊勢物語」(第一種本)の考察と検証』(私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会書誌学研究会、二〇〇六年)

山本登朗編『伊勢物語享受の展開』(伊勢物語成立と享受2、竹林舎、二〇一〇年)

嵯峨本伊勢物語から絵入り整版本へ―挿絵の板木の継承(関口一美)

山本登朗編『伊勢物語版本集成』(竹林舎、二〇一一年)

伊藤正義校注『謡曲集』(新潮日本古典集成、新潮社、二〇一五年)

森洋久編『角倉一族とその時代』(思文閣出版、二〇一五年)

第六部 嵯峨本と古活字

第一章 嵯峨本の特徴と魅力について(林進)

第二章 嵯峨本の世界(高木浩明)

第三章 嵯峨本 謡本(伊海孝充)

第四章(嵯峨本)以前の古活字版について(森上修)

国文学研究資料館編『鴨長明著『嵯峨本方丈記』(国文学研究資料館影印叢書7、勉誠出版、二〇一六年)

林屋辰三郎『角倉素庵』(読みなおす日本史、吉川弘文館、二〇一七年)

小秋元段『増補太平記と古活字版の時代』(新典社、二〇一八年)

高木浩明『中近世移行期の文化と古活字版』(勉誠出版、二〇二〇年)

小秋元段『活字から見た嵯峨本―『徒然草』とその前後―』(古典文学研究の対象と方法)花鳥社、二〇二四年)

【論文】

・本多徳治『嵯峨本考異』(ゆまに書房『玉屑』三冊、一九三二年、四三―五八頁)

・川瀬一馬『新たに知られた 嵯峨本伊勢物語など―嵯峨本図考以後』(光明堂書店『書物春秋』二五号、一九三五年、一一―一八頁)

- ・早瀬礼津子「嵯峨本出版についての一考察(一)」(東京手紙の会『書状研究』四号、一九七六年、七一―七頁)
- ・早瀬礼津子「嵯峨本出版についての一考察(二)」(東京手紙の会『書状研究』五号、一九七七年、八二―三頁)
- ・久下裕利「嵯峨本伊勢物語の挿絵を読む」(昭和女子大学光葉会編『学苑』六四五号、一九九三年、四〇―五三頁)
- ・森上修「造本美と嵯峨本の世界」館蔵(光悦謄本)『矢卓嶋』のことも(料紙・雲母模様・活字書体・版組・印刷・装訂など)(近畿大学中央図書館『香散見草』25、一九九六年、一三―一六頁)
- ・竹本幹夫「新取貴重書紹介 光悦謄本 袋綴別製新種本」(早稲田大学図書館『早稲田大学図書館紀要』四六号、一九九九年、一一―一頁)
- ・川崎博「研究資料 嵯峨本『伊勢物語』の挿絵作者について」(國華社『國華』二二五八号、二〇〇〇年、二六―三〇頁)
- ・林進「古筆つれづれ草 角倉素庵の書と嵯峨本」(古筆学研究所『水荃』二九号、二〇〇一年、四八―五一頁)
- ・寺田瑞木「江戸初期の二十四考図」(日本浮世絵協会『浮世絵芸術』一四七号、二〇〇四年、五五―七一頁)
- ・小秋元段「嵯峨本『史記』の書誌的考察(法政大学文学部『法政大学文学部紀要』四九号、二〇〇四年、一〇九―一四一頁)
- ・高木浩明「嵯峨本『伊勢物語』の書誌的考察(上)」(天理図書館『ビブリア』一二二号、二〇〇四年、三二―三頁)
- ・森上修「嵯峨本『伊勢物語』(慶長十三年版初刊館蔵)の漢字形活字について」(近畿大学中央図書館報『香散見草』33、二〇〇五年、九―二二頁)
- ・高木浩明「嵯峨本『伊勢物語』の書誌的考察(下)」(天理図書館『ビブリア』一二三号、二〇〇五年、三二―三頁)
- ・鈴木広光「嵯峨本『伊勢物語』の活字と組版」(日本近世文学会『近世文藝』八四号、二〇〇六年、一―一六頁)
- ・林進「嵯峨本『伊勢物語』(慶長十三年版初刊)の誕生(上)―素庵書体と嵯峨本活字書体」(日本古書通信『七五巻八号、日本古書通信社、二〇〇一年、二―一五頁)
- ・林進「嵯峨本『伊勢物語』(慶長十三年版初刊)の誕生(中)―出版の意図と挿絵の特徴」(日本古書通信『七五巻九号、日本古書通信社、二〇〇一年、一六―一九頁)

- 年、一六―一九頁)
 - ・林進「嵯峨本『伊勢物語』(慶長十三年版初刊)の誕生(下)―その挿絵とクリシタン画家・狩野一雲」(日本古書通信『七五巻一〇号、日本古書通信社、二〇〇一年、一五―一七頁)
 - ・斎藤彰「徒然草鳥丸本系統第三類の性格」嵯峨本・鳥丸本に対する田中忠三郎蔵本の劣化性(昭和女子大学光葉会編『学苑』八九一―二〇一五年、四〇―五〇頁)
 - ・伊海孝充「特別企画・琳派と能 光悦謄本はどのように作られたのか―成立背景の問題点」(観世會京都能樂堂『観世』八二巻九号、二〇一五年、二六―三四頁)
 - ・名見耶明「巻頭随筆 本阿弥光悦の書風と謄本」(観世會京都能樂堂『観世』八三巻三号、二〇一六年、一六―一七頁)
 - ・小秋元段「角倉素庵と『方丈記』」(法政大学文学部『法政大学文学部紀要』七七号、二〇一八年、三五―四七頁)
 - ・小秋元段「嵯峨本とその前史の一相貌」(法政大学文学部『法政大学文学部紀要』八二号、二〇二二年、二一―三七頁)
 - ・伊海孝充「光悦謄本帖装本再検：版式・分類・刊年・刊行者の諸問題」(野上記念法政大学能樂研究所編『能樂研究』四六号、二〇二二年、二三―六四頁)
 - ・小秋元段「嵯峨本とは何か」(国立国会図書館『国立国会図書館月報』National Diet Library monthly bulletin』七四七・七四八号、二〇二三年、六一―一五頁)
- 【展覧会図録】
- ・田中・博・近藤真知子・中本久美子編「光悦と能―華麗なる謄本の世界」(MOA美術館、一九九九年)
 - ・大和文華館編「没後370年記念角倉素庵…光悦・宗達・尾張徳川義直との交友の中で」(大和文華館、二〇〇二年)
 - ・天理図書館天理ギャラリー「近世の文化と活字本…きりしたん版・伏見版・嵯峨本…」(天理大学附属天理図書館編集(天理図書館、二〇〇四年))
 - ・村木敬子「光悦と出版―嵯峨本雑感」(五島美術館展覧会図録No.138「光悦―桃山の古典(クラシック)」、二〇一三年、二〇六―二〇七頁)

「展覧会カタログ」

慶應義塾ミュージアム・コモンズ×飯沼観音圓福寺

嵯峨本の誘惑・豪華活字本にみた夢

発行 二〇二五年九月三十日

企画・編集 慶應義塾ミュージアム・コモンズ

小松百華、長谷川紫穂、大前美由希、本間友

執筆

佐々木孝浩

（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授）「全章解説、作品解説 4 | 52、54 | 57」

佐々木康之

（慶應義塾大学文学部准教授）「作品解説 1、2」

小松百華

（慶應義塾ミュージアム・コモンズ所員）「作品解説 3、53 | 54」

編集協力

高須賀萌、篠律子

写真撮影

村松桂（株式会社カロワークス）「左記頁の図版を除きすべて」

写真提供

飯沼観音圓福寺「六、七、九頁」

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫「二八、三三 | 四六、八一頁」

慶應義塾大学三田メディアセンター「一四、九一頁」

デザイン

松本久木（松本工房）

印刷・製本

株式会社サンエムカラー

発行

慶應義塾ミュージアム・コモンズ

住所：一〇八八三四五東京都港区三田二一五 | 一四五

電話：〇三五四二七 | 一〇二一

<https://kemco.keio.ac.jp/>

©2025, 慶應義塾ミュージアム・コモンズ

KeiMCo Exh.18 | ISBN 978-4-910840-11-6

[Exhibition Catalogue]

Keio Museum Commons × Inumakannon Enpukuji
The Temptation of Saga-bon: Dreams and Devotion in Exquisite Printed Books

September 30, 2025

Organised and edited by Keio Museum Commons
Momoka Komatsu, Shiho Hasegawa, Miyuki Ohmae, Yu Homma

Text by Takahiro Sasaki (Professor, Keio Institute of Oriental Classics) [all columns, no.4–52, 54–57]
Yasuyuki Sasaki (Associate Professor, Faculty of Letters, Keio University) [no.1, 2]
Momoka Komatsu (Curator, Keio Museum Commons) [no.3, 53, 54]
Co-edited by Moe Takasuka, Ritsuko Shino

Photo by Katsura Muramatsu (Calo works Co. Ltd.) [all images except the following pages]

Inumakannon Enpukuji [p.6, 7, 9]
Keio Institute of Oriental Classics [p.28, pp.32–46, p.81]
Mita Media Center (Keio University Library) [p.14, 91]
Designed by Hisaki Matsumoto (MATSUMOTOKOBO Ltd.)
Printed and bound by SunM Color Co., Ltd.

Published by Keio Museum Commons
2-15-45 Mita Minato-ku, Tokyo, 108-8345, Japan
Tel: 03-5427-2021 | <https://kemco.keio.ac.jp/>

©2025, Keio Museum Commons
KeiMCo Exh.18 | ISBN 978-4-910840-11-6

